ハンス・ザックスの
悲劇『不死身のゾイフリート』

石 川 栄 作

Die Tragödie des hüernen Sewfrid von Hans Sachs

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Hans Sachs dichtet 1557 *die Tragödie des hüernen Sewfrid,* wobei er neben *dem Nibelungenlied* und *dem Rosengarten zu Worms* namentlich *das Lied vom Hürnen Seyfrid* zur direkten Vorlage gebraucht. Selbstverständlich dramatisiert er in mannigfaltiger Weise den Liedstoff. Die Charakteristik der Umarbeitungen von Hans Sachs kann folgenderweise zusammengefaßt werden.

Die meisten Bearbeitungen gehen zuerst aus den Forderungen der dramatischen Ausgestaltung hervor. Die Beratung der Räte und der Vorschlag der Erledigung des Knaben im 1. Akt sind durch kleine Erweiterungen geschickt dialogisiert. Zur dramatischen Bearbeitung gehört auch der Drachenkampf im 2. Akt: der Verlauf des Kampfs und der Verhornung wird von Sewfrid selbst erzählt. Gleichfalls entgeht der Zwerg Ewglein im 3. Akt der Behandlung, von Sewfrid gegen die Wand geschlagen zu werden. Beim Riesenkampf im 4. Akt ist auch die Darstellung der blutigen Wunden in Rücksicht auf die Aufführung ausgelassen. Ferner im 5. Akt sind der Drachenkampf und das Hinstürzen des Drachen nur mit kurzen Anmerkungen vereinfacht.

Zweitens tilgt der Dichter mit Recht die im Liedstoff hie und da gefundenen Widersprüche, um eine glatte Handlung zusammenzusetzen. Damit erscheint Sewfrid im 2. Akt nach der Ankunft in Worms folgerichtig als der Erretter der Königstochter: der Riß ist nirgends im ganzen Drama zu finden.

Drittens ist beachtenswert, daß die Episode vom Nibelungenhort im 5. Akt ausfällt. Mit der Tilgung der Schatzsage fallen zugleich danach die Senkung des Schatzes in den Rhein und die Heimkehr Ewgleins fort: der Zwerg begleitet Sewfrid und Grimhilt nach Worms und spielt dort als

Bote eine wichtige Rolle. So dramatisiert der Dichter mit Geschick die Schlußszene des 5. Akts.

Viertens ist wichtig, daß der Dichter die Episode vom Kampf zwischen dem hüernen Sewfrid und Dietrich von Bern in den 6. Akt einschiebt. Der Anlaß dazu besteht in der Strophe 172 *des Lieds vom Hürnen Seyfrid,* wo die Ritterspiele nur kurz beschrieben sind. Mit anderen Worten kann man vielleicht sagen: der Anlaß der Einschiebung kann für den Dichter wohl die Ausfüllung jener 8jährigen Lücke von der Heirat bis zum Mord gewesen sein. Genauer beobachtet, kann man aber ferner den Anlaß dazu wahrscheinlich in der Strophe 15 *des Lieds vom Hürnen Seyfrid* finden, wo Dieterich von Berne und Hiltebrandt im Zusammenhang mit der Nibelungennot genannt werden: dafür schaltet der Dichter die Kampfsepisode vielleicht aus *dem Rosengarten zu Worms* in sein eigenes Drama ein.

Bedeutsam ist zuletzt, daß der Dramatiker den Herolt, der im Liedstoff nicht erscheint, im ganzen Drama eine wichtige Rolle spielen läßt: er erscheint nicht nur als Dienstmann des Königs Gibich, sondern auch als Erzähler, der im Prolog des 1. Akts neben der Anrede an die Zuschauer einen kurzen inhaltlichen Hinweis auf das aufzuführende Stück und im Epilog des 7. Akts einen moralisierenden Rückblick gibt. Dadurch entwichelt der Dichter sein eigenes Schauspiel.

Durch die angeführten Bearbeitungen gelingt es zwar dem Dichter, *die Tragödie des hüernen Sewfrid* als sein eigenes dramatisches Stück zu dichten, aber es gibt natürlich mangelhafte Punkte im Zusammenhang mit der Verhornung Sewfrids im 6. Akt und der Moralisierung durch den Herolt im 7. Akt usw. Die Tilgung der Hortepisode beweist besonders, daß der Dichter nicht immer wesentliche Elemente der Nibelungensage überliefert. Trotzdem breitet sich die Nibelungenüberlieferung, wenn auch etwas verzerrt, erst durch Hans Sachs als eine neue bürgerliche Dichtung weit unter dem Volk aus.

序

ニュルンベルクの靴屋の親方ハンス・ザックス（Hans Sachs, 1494-1576）は、職匠歌人（マイスタージンガー）であり、詩人であり、また劇作家でもあった。彼はとても几帳面な性格であったらしく、1562年1月28日には蔵書目録まで記録しており[1]、それによると、彼の読書範囲はかなり広くて、新旧約聖書はもちろん、ギリシア・ラテンの著作をはじめとして、ペトラルカやボッカチ

1）藤代幸一編訳：中世の笑い ── 謝肉祭劇十三番 ── 法政大学出版局1983年解説232-240頁参照。

オなどのイタリア・ルネッサンスの文学作品のほかに、自国のさまざまな民衆本や愚者文学の白眉セバスティアン・ブラントの『愚人船』及びヨハネス・パウリの『戯れとまじめ』、その他多くの自然科学書、年代記、旅行記等々[2] といったように、実にありとあらゆる方面にわたっていることが容易に理解できる。のちにヤーコプ・グリムは「ハンス・ザックスは何一つ虚構しなかったが、しかし、(読んだものは) すべて書いた」(Hans Sachs erdichtet nichts, aber dichtet alles.) という名言を残している[3] が、このような多方面にわたる豊富な読書体験からハンス・ザックスの諸作品が続々と産み出されていったのである。彼が一生のうちに書き上げた作品は総計で6202篇にものぼると言われており、その内訳は職匠歌4374篇、説話詩1828篇である[4]。説話詩はさらに対話詩、宗教詩、滑稽詩、寓話詩、史詩など1600篇余りと劇210篇に分類され、劇はその上さらに、喜劇64篇、悲劇61篇、謝肉祭劇85編に分けられる[5]。本稿で取り扱う悲劇『不死身のゾイフリート』はその悲劇61篇中の一つである。

悲劇『不死身のゾイフリート』── 正式な題名は『登場人物十七名の悲劇・不死身のゾイフリート』全七幕 (Ein Tragedj mit 17 personen: Der hüernen Sewfrid, vnd hat 7 actus.) という[6]── は、ハンス・ザックス自身が作品の末尾に記している制作年月日によれば、1557年9月14日に完成した作品であり、作者62歳のときの戯曲作品ということになる。1500年代には生涯のうちで最も多くの、しかも傑作ぞろいの諸作品が書き上げられ、また1555年には職匠歌学校の審判者 (Merker) にもなっていることなどを考え合わせると、悲劇『不死身のゾイフリート』はまさに作者ハンス・ザックスの円熟期の作品と言ってもよいであろう。そしてこの戯曲作品の手本となったと推定されているのが、十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』(Das Lied vom Hürnen Seyfrid) である[7]。しかし、この戯曲作品のところどころには『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied) の影響が認められるのも事実であり、また特に第六幕では韻文

2) 藤代幸一・岡田公夫・工藤康弘：ハンス・ザックス作品集　大学書林1983年解説 5-6頁参照。
3) 同上書5頁参照。
4) 藤代幸一・田中道夫訳：ハンス・ザックス謝肉祭劇全集　高科書店1994年解説 957頁参照。
5) 同上書解説 957頁参照。
6) 本稿ではテクストに Hans Sachs: Der hürnen Seufrid. Tragoedie in sieben Acten. Halle a/S. Max Niemeyer 1880. を用い、邦訳は拙訳を試みる。
7) Vgl. Werner HOFFMANN: Mittelhochdeutsche Heldendichtung. Erich Schmidt Verlag 1974. S.104.

『不死身のザイフリート』や『ニーベルンゲンの歌』には見出されない筋の物語も展開されており、『ヴォルムスのバラ園』(Der Rosengarten zu Worms) の影響があったことも容易に推測される。ハンス・ザックスはそれらの素材を一体いかに駆使して自らの作品世界を構築しているのであろうか。本稿ではハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』の展開を第一幕から第七幕まで順番に辿りながら、韻文から戯曲への移行を一つ一つ考察することによって、この戯曲作品『不死身のゾイフリート』の特質を探り出すことにしよう。

第一幕[8)]

ハンス・ザックスのたいていの戯曲作品がそうであるように、この戯曲においてもまず最初に伝令官 (Der herolt) が登場して、観客への挨拶に続いて物語全体のあらましを簡単に紹介したあと、本来の物語が始まっている。

ハンス・ザックスがこの戯曲作品の主な素材として韻文『不死身のザイフリート』(Das Lied vom Hürnen Seyfrid)[9)] を用いたことは、冒頭における主人公の性格づけが韻文の場合とまったく同じことからも容易に理解できよう。ニーデルラント (Niderlant) のジークムント王 (Sigmund) の息子ゾイフリート (Sewfrid) は、すなわち、ハンス・ザックスの作品でも韻文と同様、まったく手に負えない腕白少年として設定されて登場しているのである。この主人公の性格は冒頭で物語全体のあらましを語った伝令官によっても「まったく無礼きわまりなく、礼節、美徳そして理性を具えておらず、粗野で、腕力強く、手に負えなかった」(10-2) とあらかじめ簡単に説明されているが、そのあとすぐさま二人の顧問官を引き連れて登場するジークムント王によっても改めて明らかにされる。父王は腕白な王子のことが心配で、二人の顧問官に自らの悩みを語って、助言を求めるのである。

Ir liebn getrewen, gebet rat,
Got mir ain sun pescheret hat,

---

8) ハンス・ザックスの原作テクストでは第一幕という表示に限って、記されていないが、本稿では便宜上第一幕と表示しておく。

9) 本稿において引用の際、テクストには Wolfgang GOLTHER: Das Lied vom Hürnen Seyfrid. Zweite Auflage. Halle a.S. Verlag von Max Niemeyer 1911 を用い、邦訳は拙訳である。なお、この韻文作品の詳細については拙稿：『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質（徳島大学教養部紀要 —— 外国語・外国文学 —— 第4巻1993年）を参照されたい。

Welcher nach mir regiren sol,
Der sich darzv nit schicket wol,
Ist gar vnadelicher art,
Helt zwcht vnd tuegent widerpart,
Ist frech, verwegen vnd muetwillig,
Starck, rüedisch vnd handelt vnpillig;
Gar kain hôfflikait wil er lern; (52-60)

親愛なるお前たちよ、助言をしてくれ。
神は私に、後継者となるべく、
一人の息子を授けてくれた。
ところが、息子はそれにふさわしくなく、
まったく高貴な性格ではない。
躾も美徳も持ち合わせていない。
厚かましく、大胆で乱暴だ。
腕力強く、粗暴で、不当に振舞う。
礼儀作法をまったく学ぼうとしないのだ。

国王のこの嘆きの言葉は、特に韻文『不死身のザイフリート』2詩節中の「少年は大変勇敢で、その上強くて、また大きくもあった」(Der knab was so můtwillg, / Darzů starck vnd auch groß. 2,1-2) という表現を逐語的に踏襲しながら、息子の性格づけを敷衍していることが明らかである。

このように手に負えない息子に関する悩みを打ち明ける国王に向かって、顧問官たちがその方策として王子の旅立ちを進言するのは韻文『不死身のザイフリート』の場合と同様である。ただハンス・ザックスは戯曲化に伴って彼らに名前をつけており、第一の顧問官は英雄伝説の名残りをとどめるディートリープ (Dietlieb)、第二の顧問官は前者にならってホルトリープ (Hortlieb) となっている[10]。従って、二人の顧問官たちが与える助言も二重に拡大され、巧みに戯曲化されている。まず第一の顧問官ディートリープは次のような助言を与える。

10) Vgl. Elly STEFFEN: Zur Quellenfrage des hürnen Seufrid von Hans Sachs. Euphorion 10, 1903. S.513. なお、本稿はこの論文に示唆されたところが多いことを付記しておく。

So last ein zeit in zihen hin,
Die lant hin vnd wider peschawen,
Das ellent versuechen vnd pawen,
Die weil er noch ist jung an jaren,
Vngenietet vnd vnerfaren.
Last in in der frembd etwas nieten,
Die frembt lert guet tuegent vnd sieten
Vnd helt die jugent in dem zaum. (67-74)

しばらく彼を旅立たせ、
国をあちこち見て回らせなさい。
異国を訪問させ、旅して回らせるのです。
彼はまだ年が若いですし、
洗練されてもいないし未経験ですから。
彼に異国で何かを始めさせるのです。
異国はよき美徳と習慣を教え、
若者に抑制をもたらしましょう。

第二の顧問官ホルトリープもこの意見に賛同して、同じように王子の旅立ちを進言しながら、国王にこう言う。

Ja, weil Sewfrid das thuet pegern,
Eur kůniglich mayestat sun,
Solt ir in dem im folgen thun,
In etwan schicken in Franckreich
Oder in Spania der gleich. (79-83)
・・・
Dadurch von grobheit er erwacht,
Wirt den auch ertig vnd geschlacht,
Als den gepůert ains kůnigs sun. (90-2)

そうです、あなたの王子ゾイフリート様は
それを望んでいらっしゃるのですから、
あなたはそうさせるべきです。

どこかフランスへでも、
あるいはスペインへでも行かせなさい。
・・・
それによって王子様は粗野から目覚め、
おとなしく、上品にもなられて、
国王の子息にふさわしい人物となりましょう。

二人の顧問官のこのような助言は韻文『不死身のザイフリート』3詩節中の「彼がとどまりたくないなら、彼に旅立ちをさせなさい。それが最上の考えです。彼に何かをやらせるのです。そうすれば彼はおとなしくなるでしょう。何年かしたら、彼は大変勇敢な英雄となりましょう」(Nun last jn ziehen hyn, / So er nicht bleyben wille. / Das ist der beste syn, / Vnd last jn etwas nieten, / So wirdt er bendig zwar. / Er wirdt ein Held vil kůne, / Vnd lebt er etlich Jar. 3,2-8)という表現に由来することは明らかであり、ここでは戯曲にふさわしい形式で二つに分けて、顧問官たちの進言を強める結果ともなっている。ただ第二の顧問官が「どこかフランスへでも、スペインへでも」(82-3) と言って旅先を指定する場面はもちろん韻文『不死身のザイフリート』においては語られていないが、この第二の顧問官の提案は作者ハンス・ザックスをフランツ一世 (Franz I) やカールス五世 (Karls V) との同時代人であることを認識させるものと考えられている[11]。

ともかくも二人の顧問官の進言に従ってジークムント王は王子ゾイフリートに旅立ちを許す決意をするが、しかし行き先は、韻文の場合と違って、最初からライン河畔のヴォルムスへ向かうことが決定づけられている。国王は顧問官たちの助言に対して、次のように答えるのである。

Nun, eurem rat wil ich folg thun,
Wil in nauff schickn gen Wurms an Rein,
An kůnig Gibichs hoff allein. (93-5)

では、お前たちの助言に従って、
息子を一人でライン河畔ヴォルムスの
ギービッヒ王の宮廷に送ることにしよう。

---

11) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.513.

ジークムント王はただちに王子ゾイフリートを呼び出して、その旨を伝えるが、王子の旅立ちにあたっては気高く優れた百人の家来を伴につけ（103-5）、さらに衣裳や金をも持たせてやろう（106）とする。ところが、この父王の申し出に対してゾイフリートは「財産も金も必要でない」（112）し、「自分について来る家来も必要でない」（116-7）と答えて、伴をも連れずに一人で出かけて行く。この旅立ちの場面では『ニーベルンゲンの歌』（Das Nibelungenlied）[12] における王子ジーフリトのヴォルムスへの旅立ちの描写（57-70詩節）が恐らく作用しているのであろう。ハンス・ザックスは素材として韻文『不死身のザイフリート』のほかに、『ニーベルンゲンの歌』をも傍らに置いていると考えてよいであろう。

こうして一人で旅に出た王子ゾイフリートが最初に辿り着いたのは、しかし、ライン河畔のヴォルムスではなく、韻文『不死身のザイフリート』の場合と同じく、森の中の鍛冶屋である。この鍛冶屋でのエピソードは『ニーベルンゲンの歌』には見出されないもので、かなり古い伝承に属するものと言われている部分である[13]。ハンス・ザックスがこの場面でも韻文『不死身のザイフリート』を素材に用いていることは、大筋において両者が一致することからも明らかである。ただゾイフリートが親方から小さな金槌ではなく、大きな金槌を受け取る場面は巧みに対話化されている。そしてその大きな金槌でもってゾイフリートが金敷に向かって示す「ものすごい一撃」（ein grausamen schlag）についても作者ハンス・ザックスによって153行のあとの卜書で簡単にほのめかされているだけであり[14]、これも戯曲的改作によるものと考えてよいであろう。ともかくゾイフリートの力は強すぎるので鍛冶仕事にはまったく役立たないことを親方が咎めると、ゾイフリートは金槌で親方と徒弟を打ちのめしてしまう。そこで韻文の場合と同様、親方は腕白少年を厄介払いするために森の中の炭焼きのと

---

12) 当時流布していた『ニーベルンゲンの歌』の写本としていわゆる「ピアリスト本」の写本kが考えられる（vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.513)が、本稿では便宜上最も原典に近いと推定される写本B（Helmut de BOOR: Das Nibelungenlied. 20. Auflage. F.A.Brockhaus Wiesbaden 1972）に従って詩節番号を表示し、邦訳には相良守峯訳（岩波文庫）を用いる。

13) 主人公が鍛冶屋に奉公するエピソードはかなり古い伝説要素であり、今日では北欧の伝承以外には韻文『不死身のザイフリート』と、のちにそれを種本として成立した民衆本にしか見出されない。(Vgl. Deutsche Volksbücher in drei Bänden. Erster Band. 5. überarbeitete Auflage. Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1992. S.315.)

14) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.508.

ころへ遣わせることになるが、しかし、この戯曲作品では鍛冶屋の徒弟がそれを最初に提案することになっている。すなわち、「少年をどうして片付けようか」(169) と思案している親方に向かって、徒弟は次のように進言するのである。

Maister, ich wil euch ratten recht,
Schickt den knecht in den walt hinaus,
Sprecht, darin halt ein koler haus;
Gebt im ain korb vnd haist in holn
Ein korbfol gueter aychen koln.
Pald er den hinein kumpt in walt,
So wirt in den erschmecken pald
Der trach, der in der hollen leit,
Wirt in ergrewffen zv der zeit
Vnd in mit seinem schwanz verstrickn,
Wůrgen vnd in sein rachen schlickn;
So kum wir sein mit eren ab. (163-74)

親方、私がよい忠告をしてあげましょう。
その徒弟を森へ行かせるのです。
ねえ、森の中には炭焼きの家があるでしょう。
彼に籠を持たせて、籠いっぱいのよい炭を
持って帰るよう命じるのです。
彼が森の中に入るや否や、
洞穴に棲んでいる竜が
すぐに彼を嗅ぎつけるでしょう。
竜は彼をただちに捕らえて、
尻尾で巻きつけ、
首をしめて、口にのみ込むことでしょう。
こうして我々は彼をうまく片付けることができるのです。

「籠いっぱいのよい炭」(Ein korbfol gueter aychen koln, 167) というところにもいかにも当時のハンス・ザックスらしい付加表現が認められる[15] が、この

15) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.515.

場面では何よりも徒弟が腕白少年を竜の棲む森へ遣わせることを提案することでもって、ハンス・ザックスはこの腕白少年を厄介払いする筋立てを巧みに戯曲化していると言えるのである。徒弟の提案を聞くや否や、親方も「同じことを考えていたのだ」(175) と答えて、ただちにそれを実行に移すのである。森の中の炭焼きの家から炭を持って帰るよう命ぜられたゾイフリートは、さっそく籠を手に取って出かけて行く。一方、鍛冶屋の親方と徒弟も竜が少年をのみ込むさまを遠くから眺めるため、そこを立ち去って行くことになっているが、これなども戯曲化に伴う細かな改作の一つと考えてよいであろう。

第二幕

こうして森の中にやって来たゾイフリートは、炭焼きの家をあちこちと探しているうちに、ついに薮の中に陰気で深い岩の洞穴を見つけ、その中に棲んでいた竜と戦いを展開することになるが、その戦いは198行のあとに挿入されている数行のト書で簡単に済まされている。当時の舞台装置を考えた上での戯曲的改作によるものであることは言うまでもない。そこで竜と戦い、角質の皮膚となった経過についてはゾイフリート自身の語りの中で語られることになる。竜を焼き焦がしたあと、ゾイフリートはこう語っている。

Sol ich nit von grosem glueck sagen?
Ich hab den grossen wurmb erschlagen,
Nach dem mit esten in verprent;
Da ist zerschmolzen an dem ent
Sein horn vnd zvsamen gerunnen,
Gleich wie ein pechlein aus eim prunnen.
Das wundert mich im herzen mein
Vnd daucht mit ainem finger drein,
Vnd als der ist erkaltet worn,
Da wart mein finger lawter horn;
Des frewt ich mich vnd zog zvhant
Von meinem leib all mein gewant
Vnd also mueter nackat mich
Mit diesem warmen horn pestrich.
Des pin ich gleich hinden vnd forn
An meiner hawt ganz huernen worn,

Darauff kain schwert nit haften kan. (199-215)

大きな幸運について語ってはいけないだろうか？
私は大きな竜を打ち殺し、
その後、木の枝とともにそれを焼き焦がした。
するとしまいには竜の角質が
溶けて、どっと流れ出てきた。
まるで泉から小川が流れ出すかのように。
私は心の中で不思議に思い、
一本の指をその中に浸してみた。
すると指が冷えると、
私の指はまったく角質となったのだ。
私はうれしくなって、ただちに
身体からすべての衣服を脱ぎ取って、
つまり大胆にも裸になって、
この熱い角質を塗りつけたのだ。
そのため私はすぐに前後の
皮膚がすっかり角質となって、
どんな剣もその上を突き刺すことはできないのだ。

韻文『不死身のザイフリート』の9-11詩節をそのまま踏襲して再現していることは一読して明白である。ただ一つ例外は、英雄の皮膚の角質化に関して韻文11詩節では「彼はすっかり角質となったが、ただ肩の間だけはそうならなかった」(Das er ward aller hůrnen / Dann zwischen den schultern nit. 11,1-2)と語られているのに対して、ハンス・ザックスは「前後（hinden vnd forn）の皮膚がすっかり角質となった」(213-4) と表現しているだけで、両肩間の傷つく箇所についてはまったく触れていない点である。不死身の英雄の「両肩間の傷つく急所」は、ハンス・ザックスの作品においてもなくてはならない伝承要素の一つである。事実、第七幕でゾイフリートが暗殺される場面においてはゾイフリートの両肩間に急所がある（1038-40行参照）ことが前提とされている。だとすれば、作者ハンス・ザックスはこの第二幕での角質となる場面においてはそれをうっかり書き落としてしまったのであろうか？否、事実はその逆で、この削除は作者ハンス・ザックスのきめ細かな配慮によるものである。すなわち、作者ハンス・ザックスは戯曲化に伴い、皮膚の角質化の経過をゾイフリー

ト本人に語らせることにしたので、「両肩間の急所」をまさにその本人に語らせるわけにはいかなかったのである。もしこの段階でゾイフリート自身がまだ角質化していない箇所があることを知っていれば、彼は恐らくそこにも竜の熱い角質を塗りつけていたであろうし、そうすればのちの第七幕の悲劇は成立しえなくなるからである。従って、この両肩間の急所の削除なども戯曲化に伴う改作の一つと考えてよいであろう。

さらにこの場面で作者ハンス・ザックスのもっと綿密な改作と見なされうるのは、ゾイフリートの皮膚の角質化が結局のところライン河畔のヴォルムスに足を向けるきっかけとなっている点であろう。すなわち、上に引用した言葉に続けて、英雄ゾイフリートはこう言っているのである。

Des gleicht mir iz auf ert kein man,
Des mag ich vurpas weiter nit
Mein leben füeren pey dem schmit;
Wil mich abton meinr groben weis,
Hoffzuecht leren mit allem fleis.
Ich wil den nechsten auf Wurms fragen
Ans künigs hoff; wan ich hör sagen,
Er hab ein dochter, schon vnd zart,
Grimhilt, ganz holtseliger art;
Ob ich die selb erwerben kund,
Das erfrewt mir meins herzen grund. (216-26)

私のような男はこの世にはいない。
それゆえ私はもうこれ以上
鍛冶屋で人生を送るつもりはない。
私は粗暴な振舞いをやめて、
宮廷の躾を熱心に学ぶことにしよう。
ヴォルムスの王宮へ、最も近い道を辿って、
行くことにしよう。伝え聞くところによると、
国王には美しくて優しい娘が一人いて、
グリームヒルトといい、まったく愛らしい乙女だという。
その乙女を私が貰い受けることができたら、
私は心の底からうれしく思うのだが。

竜退治によって皮膚が角質化したゾイフリートは今や「粗暴な振舞いをやめて、宮廷の躾を熱心に学ぶ」(19-20) 決意さえ見せており、第一幕で二人の顧問官たちが期待していたことがここでついに実現するに至ったのである。このように主人公ゾイフリートの成長過程が本人自らの口を通して語られているところに、戯曲としてのこの作品の特質があると言ってよいであろう。否、それどころか、さらにゾイフリートはヴォルムスの王宮へ行く動機として、宮廷の躾を身につけることのほかに、美しくて優しいグリームヒルトへの求婚の意図をも明らかにしているのであり、この点でこの作品は『ニーベルンゲンの歌』の展開にかなり接近しているとも言えよう。

こうして主人公の積極的な意図を持つ行動によって、今や舞台はライン河畔ヴォルムスの宮廷へと移る。そこのギービッヒ王(Gibich)は愛しい娘グリームヒルト(Grimhilt)に会いたくて、伝令官を娘のところへ呼びに遣わせる。伝令官がその場を去ったあとで、ゾイフリートが到着し、ギービッヒ王に挨拶をして、さっそくギービッヒ王に仕えたい旨を申し出る (235)。ギービッヒ王は到着の人物自身から彼が「勇敢で、大胆で不屈の勇士である」(242) のに加えて「気高い血筋の出身である」(245-6)ことを聞き知ると、それを承諾する。一方ゾイフリートもゾイフリートで彼に誠実に仕えることを誓う (251-2)。

そこへ伝令官に伴われてギービッヒ王の娘グリームヒルトが登場すると、父王は娘を喜ばせ楽しませるために、ライン河畔の野原で槍試合を催す旨を伝えるとともに、姫は城の胸壁から眺めているがよいと言う。同時にそこに居合わせたゾイフリートに対しては、彼も槍試合に参加するがよいと言い渡して、ゾイフリートに馬と鎧と槍を与えさせる。国王はゾイフリートとともにただちにライン河畔の岸辺へと急ぐべく、そこを立ち去る。居残ったグリームヒルトは密かに若い勇敢な英雄をほめ称えながら、一人で静かに城の胸壁で騎士たちの試合を眺めることにするが、この展開は『ニーベルンゲンの歌』で英雄ジーフリトがヴォルムスに到着したあとで騎士たちが競技を催す場面 (130-8詩節) を彷彿させる。特に『ニーベルンゲンの歌』133詩節には「若い者たち、騎士や侍童が城庭で競技に打興じるとき、あてなる王女クリエムヒルトはその後しばしば窓ごしに、そのさまを眺めていた」(133,1-3) と語られており、ハンス・ザックスはこの場面を描き出すにあたって『ニーベルンゲンの歌』を念頭に置いていたことは十分考えられうることである。

ところが、その次の場面では『ニーベルンゲンの歌』にはまったく見出されない新しい筋が展開される[16]。韻文『不死身のザイフリート』に語られている竜による姫の誘拐がそれである。韻文ではこの場面で竜については単に「そのとき荒々しい竜が空を飛んで来て」(Do kam ein wilder Trach / Geflogen inn den lůfften. 17,6-7) としか表現されていないのに対して、ハンス・ザックスの戯曲では恐ろしい竜の接近が姫の嘆きとして次のように鮮やかに描き出されている。

Her got, wie ein grawsamer wurm
Flewgt daher mit erschreckling furm,
So gros vnd grawsam vngehewr!
Aus seinem rachen speit er fewr,
Er lest sich herab aus dem lueft
Vnd schwingt sich zv der erden gruest,
Zv des schlos zinnen, eilt auf mich ——
Hilff mir, her got, des pit ich dich. (285-92)

神様、何と恐ろしい竜が
身の毛ももだつ姿でこちらへ飛んできたことでしょう。
とても大きくて残忍な怪獣です！
口からは火を吐き、
空から舞い降りて来て、
地上で身体を揺り動かしています。
城の胸壁にいる私の方へ急いで来ています。
助けて、神様、お願いです。

嘆きというかたちで姫自身に接近する竜の恐ろしい有様を語らせているのは、当時の戯曲にふさわしい表現形式である。またここでグリームヒルトの立っている場所が、韻文では窓 (fenster) となっているのを胸壁 (zinne) に変更されているのも、韻律の関係 (vgl. 263-4) もさることながら、何よりもまず当時の

16) ただし、『ニーベルンゲンの歌』写本mだけは例外で、遺されている歌章目録から、写本mでは竜による姫の誘拐が語られていることが推測される。詳細は拙稿：『ニーベルンゲンの歌』写本mと『不死身のザイフリート』(徳島大学総合科学部「言語文化研究」第1巻1994年) を参照されたい。

舞台装置を考慮に入れての改作であろう[17]。さらに竜が彼女を掴んで急いで連れ去る様子も、当然のことながら、その292行の直後のト書で簡単に済まされている。連れ去られる姫は叫び声をあげる (293-8) が、その叫び声を聞いて、ギービッヒ王はゾイフリートと伝令官を伴って駆け戻って来るものの、姫の姿はもはや見られない。ギービッヒ王は嘆き悲しみ、竜が娘をのみ込んでしまうのではないかと恐れ、心配していると、伝令官は国王を慰めて言う。

Durchleuchtiger kůng, pey meinr er,
Ich glaub, ir geschech nichs am leben;
Der trach der fůert sie wol vnd eben,
Sitlich, ganz hofflich vnd gemach
Flog durch den lueft der grawsam trach
Hin aufwerz gegen Orient,
Ainr grosen wůesten er zv lent.
So glawb ich warhaft wol, darinen
Wert man sie frisch vnd gesunt finnen
Sambt dem trachen, wer das derfft wagen. (310-9)

誉れ高き国王様、私の名誉にかけて、
私が思いますに、令嬢様の命にかかわることは起こっておりません。
竜はひとまず彼女を連れ去っただけです。
ゆっくりと、まったく丁重にそして静かに
空を通ってその恐ろしい竜は、
オリエントの方へ高く飛んで行って、
広大な荒野へと辿り着いたのです。
私は本当に信じておりますが、その荒野の中で、
あえて彼女を連れ去った竜とともに、
彼女が元気で健康な姿で暮らしているのが見つけられましょう。

韻文『不死身のザイフリート』18-9詩節で語られている竜の飛行の方角とその有様を、ハンス・ザックスの戯曲では伝令官が国王を慰めるかたちで巧みに説明することになっており、これなども当時の戯曲形式にふさわしいものと言え

17) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.o., S.517.

よう。また韻文では竜の飛行の方角は明らかにされていないが、ここでは特にオリエントと明示されているのも、当時の人々がオリエントについて抱いていた印象と大いに関係しているのであろう。オリエントはすでに数百年も前から伝説と不思議の国であり、当時の人々にはぼんやりとした遠方のイメージを与えていたのである[18]。そのようなオリエント方面へ竜が飛び去ったことを伝令官から聞き知ると、ギービッヒ王はただちに次のように言い伝えるのである。

Mein erenholt, thw pald ansagen
Zw hoff, welcher sich vnterwint,
Zw suchen das kůnicklich kint,
Vnd wo er sie von disem trachen
Lebent vnd gsund kan ledig machen,
Des sol die liebste dochter mein
Darnach elicher gmahel sein. (320-6)

わが伝令官よ、すぐに宮廷に
通達しなさい。姫を探しに
出かけてくれる者で、
もし姫をこの竜から
生きて健康のまま救い出すことができたら、
そのときにはわが最愛の娘を
その者の妻にしてあげようと。

韻文『不死身のザイフリート』には見出されないこのようなギービッヒ王の言葉を聞くや否や、まさにこの姫への求婚のためにヴォルムスにやって来ていた不死身のゾイフリートは次のように即答する。

Herr kůnig, last nit weiter fragen,
Mein leib vnd leben wil ich wagen
Vnd selb gegen Orient reitten
In die wůesteney vnd da streitten
Mit dem trachen, dem gifting, pösen

18) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.514.

Vnd die junckfrawen von im lösen,
Eretten sie von dem verderben,
Oder selb willig darob sterben. (327-34)

国王様、それ以上おっしゃらずに。
私が身体と生命を賭けて、
自らオリエントの荒野へ
出かけて行って、そこで
有毒の邪悪な竜と戦い、
姫を竜から救い出して、
姫を破滅から解放してあげましょう。
さもなくば私は自ら死ぬ覚悟です。

韻文『不死身のザイフリート』にはこのようにギービッヒ王に向かって自らの決意のほどを述べる主人公の言葉はどこにも見出されず、むしろ逆に、その時点で主人公がギービッヒ王に仕えていたのか否か、はっきりしない描写が随所に見出される。例えば、韻文32詩節では「国王は遠いありとあらゆる国へ使者を送って、誰か知らぬかと、彼の美しい娘を捜させた。あらゆる国々の中でのこととあって、それは大変な苦労であったが、ついに一人の優れた勇士が彼女を竜の岩から救い出したのである」と語られているものの、この時点でその一人の優れた勇士（ザイフリート）がギービッヒ王の送り出した使者の一人であったのか否かは不明である。なぜなら、韻文ではその直後の33詩節で改めて紹介されて登場するザイフリートが悪竜の棲む陰気な森に辿り着くのは、あとの描写（34-7詩節）などからも分かるように、まったくの偶然の出来事として描かれているからである。こうした韻文における矛盾をハンス・ザックスは当然のことながら削除して、最初からゾイフリートは乙女を救い出しに出かけることを本人自らが語ることによって、物語の筋立てを滑らかにしていると言える。こうしてハンス・ザックスの戯曲では不死身のゾイフリートは最初からギービッヒ王の使者としてその娘を悪竜から救い出すべく、遠いオリエントの山をめざして出かけて行くのである。

第三幕

第三幕に入ると、そのオリエントの高い岩山に連れ去られたグリームヒルト姫が再登場する。韻文では姫が連れ去られた（18-9詩節）あと、すぐに19-31詩

節で竜の正体とともに姫の嘆きが語られており、さらにのちの124-5詩節でも竜の変身の事情が繰り返し語られているが、ハンス・ザックスの第三幕冒頭部分はその戯曲化である。グリームヒルト姫は、わが身にふりかかった不幸を嘆き、絶望している（346-62）と、竜は乙女を慰めて言う。

Edle junckfraw, gehabt euch wol,
Kain laid euch widerfaren sol,
Den das ir můst gefangen sein
Ein kurze zeit auf diesem stein.
Doch wil ich euch vor allen dingen
Genug zv essn vnd drincken pringen,
Pis das verlossen sint fůnff jar
Vnd ain tag. Als den ich vůrwar
Wirt wider zv aim jůngeling
Verwandelt werden gar geling,
Wie ich auch vor hin war mit nam
Geporn von kůnicklichem stam
In Kriechen lant, vnd pin durch zorn
Von ainr puelschaft verfluechet worn,
Pezaubert mit dewflischem gspenst
Zum trachen, wie dw mich iz kenst.
Drumb, mein Grimhilt, las dein vnmuet,
Pis diese zeit verlawffen thuet,
Als den wil ich dichs als ergezen,
In gwalt vnd kůncklich herschaft sezen. (364-83)

気高い姫よ、元気をお出し。
災いは起こりはしないから。
ただそなたはしばらくの間この岩山で
囚われの身となっていなければならないだけだ。
しかし私はそなたに何よりもまず
十分な食べ物と飲み物を持って来てあげよう。
五年と一日が経過するまで。
そしたら私は確かに

まったく突然だが、
再び一人の若者に変身することになっているのだ。
かつて私は名前もついていて、
ギリシアの王家の血筋の
生まれで、ある色事のために
怒りによって呪いをかけられ、
悪霊でもって、ご覧の通り、
竜に変身させられているのだ。
だから、わがグリームヒルトよ、不機嫌はやめてくれ。
この期限が過ぎ去るまでのことだ。
そしたら私はそなたにすべての償いをして、
権力と王家の支配権をそなたに委ねよう。

竜が五年後にはまた元の若い人間に変身すること（370-3)、並びに現在竜の姿をしているのは、ある色事のために一人の女性によって呪いをかけられたため(376-9）といった竜の変身の事情については、韻文『不死身のザイフリート』の場合とまったく同様である。ただ竜がもともとギリシアの王家の血筋の生まれである（374-6）としているのは作者ハンス・ザックスの付加表現と考えてよいであろう。またその気高い身分に従って、竜が人間に戻ったら乙女を単に妻にするだけという韻文とは異なって、この戯曲では竜が乙女グリームヒルトにその権力と王家の支配権を委ねることを約束している点なども細かな改作点である。ともかくもこのような身勝手な竜の考えを聞いたグリームヒルト姫は、韻文の場合（24詩節）とほぼ同じく[19]、「定められた期限がくるまで私を父のもとへ帰して下さい。それまでには再びあなたのもとに戻って来ることを誓いますから」(384-8)と懇願するが、竜はもちろんそれを許さない。「五年がくるまで、お前はこの世で誰にも会えないのだ」(390-1）と言って、竜は無慈悲にも乙女を捕らえたままにしておくのである。

そこへ登場して来るのが不死身のゾイフリートである。ゾイフリートはこの戯曲では、韻文の場合のように狩りに出かけていて偶然この岩山に近づいたのではなく、最初からギービッヒ王の使者としてその姫を悪竜から救い出すためにこの場へやって来たのであるから、韻文34－5詩節に読み取られた「はやぶ

19) ただし、韻文『不死身のザイフリート』では姫が以下のような願いを口にするのは、竜の正体を聞く(25-8詩節)前のことである。

さ」(Habich) と「猟犬」(Bracke) は、当然のことながら、連れていない。ただこの場に到着するまでには、韻文の場合と同様に、四年の歳月が経過していることはあとの描写 (524行、638-9行、751行、790行参照) などからも明らかである。そして韻文では36詩節で「ザイフリートは飲まず食わずで、休みもしないで、四日目まで犬を追い、竜の跡を急いで辿って行った」(Seyfrid eylt nach jn balde / Vntz auff den vierdten tag, / Das er essens vnd trinckens / Vnd auch nie růge pflag, / Biß an den vierdten morgen. 36,1-5) と語っているが、ハンス・ザックスはここでそれを逐語的に踏襲しつつ、ゾイフリート自身に「私は今や四夜と昼の間歩いて来て、決して休んでいない。また食べてもいないし、飲んでもいない」(Nun pin ich ie vier nacht vnd tag / Gangen, das ich nie ruens pflag, / Hab auch nit gessen noch getruncken. 396-8) と語らせている。ゾイフリートがヴォルムスの宮廷にやって来て、グリームヒルト姫を救出する使者となったことに関しては、上ですでに述べた通り、矛盾をなくすため大幅な改作が施されているものの、その他の点では韻文をできる限り踏襲していることが容易に理解できよう。

そこへ次に登場して来るのが侏儒(こびと)王オイグライン (Ewglein) である。立派な王冠を被り、立派な衣裳を身につけているこの侏儒王についても、韻文『不死身のザイフリート』をかなり忠実に踏襲している。ただここでは韻文において見出されたような矛盾はもちろん削除されていて、両者の間で交わされる対話 (412-34) も、侏儒王が知識豊かな人物であることを証明しているだけである。すなわち、知識豊かなオイグラインは竜に連れ去られた乙女のことについてもすでに情報を知り得ているのであり、ゾイフリートに次のように語る。

Ich rat, thw dem gepirg nit nehen,
Wiltw nit leiden vngemach;
Wan darauff wont ain groser trach;
Dw pist des dods, pald er dich spůert.
Er hat ain junckfraw hin gefůert,
Ains kůnigs dochter an dem Rein,
Die wont hoch oben auf dem stein.
Der hůet er tag vnd nacht so ser,
Die wirt erlösset nimer mer,
Von herzen so erparmbt mich die. (425-34)

忠告しておくが、いやな思いをしたくなければ、
君はこの山に近づいてはいけない。
というのも、山頂には一匹の大きな竜が棲んでいるから。
竜が君に気づいたら、君は死んじゃうよ。
竜は一人の姫、
ライン河畔のある国王の娘を連れ去って、
姫はあそこの高い岩山の上で暮らしているのだ。
竜が昼夜彼女をよく見張っているので、
彼女は決して救出されはしないのだ。
心底から彼女のことがあわれに思われてならない。

韻文『不死身のザイフリート』ではここで初めてザイフリートは竜にさらわれた乙女のことを聞き知ったのに対して、このハンス・ザックスの作品では、すでに述べたように、まさにこの乙女救出のためにこの岩山へやって来たのであるから、ゾイフリートもそれを明らかにして決意を示す。

Von irent wegen pin ich hie;
Die junckfraw ich erlösen wil. (435-6)

彼女のためにこそ私はここへやって来たのだ。
姫を私は救い出すつもりだ。

これに対して侏儒オイグラインは逃げることを勧める (437-8) が、決意の堅いゾイフリートはしきりに竜の岩山に通ずる道を教えてほしいと頼む。侏儒は依然として拒むので、ついにゾイフリートは侏儒の髭をつかみ、もう一方の手で剣をつかんで、脅す。韻文の場合とほぼ同じ展開と言ってよいが、ただここではゾイフリートが侏儒を岩壁に投げつける行為は削除されており、これなども戯曲化に伴うふさわしい改作である[20]。そこで剣で威された侏儒は、こう語る。

Mein herr Sewfrid, stil deinen zorn,
Dw küner helde auserkorn,
Ich wil dich weissen auf das spor,

20) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.759.

Doch must den schlüessel holen vor
Pey aim rissen, haist Kuperon,
Ein groser, vngefüeger mon.
Mit dem aber mustw auch kempfen. (452-8)

わがゾイフリート殿、怒りをしずめてくれ。
君、選び抜かれた勇敢な英雄よ。
私は君に道を教えてやろう。
しかしその前に鍵を入手しなくてはならない。
鍵はクペローンという名の巨人、
大きくて恐ろしい男のところにある。
その男とも君は戦わねばならないのだ。

クペローンという名の巨人が鍵を持っていることなども、韻文とまったく同じであり、ゾイフリートはその鍵を奪い取るため、巨人と戦う決意を示すと、侏儒はさらに竜のことにも言及してこう言う。

Ob dw ansigst dem riesen eben,
Mustw erst kempfen mit dem trachen,
Der verschlünd dich in seinen rachen.
Ich sach nie kain schrecklichern würm,
Geflüegelt mit grawsamen fürm,
Sein zen, die sint eyseren ganz,
Mit ainem giftig, langen schwanz;
Auch thuet er hellisch fewer speyen,
Vor im vermochstw dich nit freyen,
Dw müestest vor im liegen dot. (467-76)

君が巨人に打ち勝ったら、
次には君は竜と戦わねばならない。
竜は君を口の中にのみ込んでしまうだろう。
恐ろしい姿で飛んで、
その顎(あご)はまったく鉄のように堅く、
有毒の長い尻尾をもつけている、

そのような身の毛もよだつ竜を私は見たことがない。
竜はまた極熱の火をも吐き、
竜を前にしては君は身動きもできない。
君は竜の前で倒れ死なねばならないだろう。

このように侏儒によって竜の恐ろしい姿が説明される場面は韻文には見出されない[21]が、ここで語られている竜の姿は韻文のあちこちに見られる竜の描写とほぼ一致すると言ってよいであろう。このような恐ろしい竜のことを聞き知っても、不死身のゾイフリートはもちろん尻込みせずに、次のように語って乙女救出の決意のほどを示す。

Zw hilff so wil ich nemen got,
Zw ueberwinden disen trachen,
Die schön junckfraw ledig zv machen,
Wan ich hab vor pey jungen tagen
Auch ainen trachen dot geschlagen,
Hab auch zwen lebentig gefangen,
Pein schwenzen vbert mawer ghangen.
Derhalb weis mich nur zv dem riesen,
Da wil ich mein leben verliesen
Oder erlangen sieg vnd hail.
Wirt die zart junckfraw mir zv tail,
So sol sie mein gemahel sein,
Die weil ich hab das leben mein. (477-89)

私は神に助けてもらって、
この竜に打ち勝ち、
美しい乙女を解放するつもりだ。
というのも、私は以前若いときにも
一匹の竜を打ち殺したことがあるし、
また二匹の竜を生け捕りにして、

21) ただし、韻文『不死身のザイフリート』ではのちにザイフリートが竜の岩山で乙女と再会した場面（104詩節）で、乙女がその竜の恐ろしさについて語っている。

その尻尾を壁の上に吊したこともあるのだ。
だから、どうか巨人のところへの道を教えてくれ。
そこで私は生命を失うか、
勝利と至福を手に入れるかのどちらかだ。
優しい乙女が取り戻せたら、
彼女は私の妻となるのだ。
私の生命のある限り。

韻文『不死身のザイフリート』63詩節でザイフリートは巨人と戦う前に「神が助けてくれよう。神がその強さとその力を私に貸して下さるので、お前はその高貴な生まれの乙女を私に渡さざるをえないだろう」(Got ist zů hilff geporn, / Die wöll er mir verleyhen, / Seyn sterck vnd auch seyn macht, / Das du mir můssest geben / Die Junckfraw so geschacht. 63,4-8) という言葉を口にしているが、ハンス・ザックスのこの場面の冒頭の言葉は明らかにそれを踏襲したものであろう。否、それだけにとどまらず、上記引用のゾイフリートの言葉の中で、例えば「二匹の竜を生け捕りにして、その尻尾を壁の上に吊したこともある」(482-3) という表現などは、韻文33詩節中の「彼は大きな力を持っていたので、獅子を捕らえて、それをおもしろがって高い木に吊したりした」(Der pflag so grosser stercke, / Das er die Löwen fieng, / Das er sie zů gespötte / Hoch an die bäume hieng. 33,5-8) という描写の名残りと考えてよいであろう。ともかくも力の点で自信に満ち溢れた英雄ゾイフリートは、ついに巨人の住処への道を侏儒王に案内してもらうこととなり、竜の岩山へ通ずる道の鍵を奪い取るべく、まずはその巨人の住む洞穴へと出かけて行くのである。

第四幕

さて、その巨人クペローン (Der ries Kuperon) は洞穴の前で大きな鍵を手に持って、上空を見上げている。この第四幕冒頭部分はハンス・ザックス独自の挿入部分であり、ひどい霧が出ている夜であることは、巨人がその場で口にする独り言 (499−510) から分かる。巨人はその夜は、いつも岩山をあちこち見回して乙女を護っている狂暴な竜に脅かされて目覚めた様子であるが、何もすることがないので、再び寝るために洞穴へ入って行く。

そこへゾイフリートが侏儒王の案内で到着し、戦斧で巨人の住処のドアをたたくと、巨人が鋼鉄の棒を持って出て来る件は、韻文『不死身のザイフリート』の場合と同じである。「なぜ俺の住処のドアをたたくのか？お前はすぐに俺から

一撃をくらうことになるぞ」(515-8) と言って、巨人がゾイフリートを威すと、ゾイフリートはそれに対して答える。

Schlagens peger ich nit von dir,
Sůnder wölst mir den schlůesel geben,
Das ich von dem hartseling leben
Die zarten junckfraw mag erlösen,
Von dem trachen, dem vberpössen,
Der sie wider recht helt gefangen
Nun etwas pey vier jarn vergangen,
Da ers kůng Gibich hat genumen.
Schaw, ries, darum pin ich herkumen,
Die junckfraw wider haim zv pringen. (518-27)

お前の一撃をくらうことなど私は望んでいない。
私が苛酷な生活から
優しい乙女を解放し、
邪悪な竜から救出できるよう、
おとなしく鍵を私に渡すんだ。
竜は彼女を不当に捕らえたのだ。
竜がギービッヒ王から娘を奪い去ってから、
およそ四年が過ぎ去った。
見よ、巨人よ、私がここへやって来たのは
乙女を再び故郷へ帰すためなのだ。

グリームヒルト姫が竜に連れ去られてから四年の歳月が過ぎ去っていることは、韻文の場合（64詩節）と同様、このゾイフリートの言葉からも明らかである。闖入者の厚かましい言葉に気分を害した巨人は、再度相手を威嚇する(528-35)が、不死身のゾイフリートは鍵を入手するまではあくまでも止めはしないことを告げる（536-7)。そこでゾイフリートと巨人は激しい戦いを繰り広げることになるが、この戦いに関しても韻文『不死身のザイフリート』とまったく同じ展開となっている。すなわち、巨人は鉄棒を自分の手から落としたため、一端洞穴に逃げ込む。再度洞穴から出て来るときには、巨人は「楯」(schilt) と「兜」(helmlin) と「剣」(schwert) を持っているが、「楯」と「兜」は韻文72詩節の

描写、そして「剣」は韻文71詩節の描写を踏襲したものと考えてよいであろう[22]。このような丈夫な装いで巨人はゾイフリートを再度威嚇して言う。

Haar, ich wil dir den schlůesel geben!
Dw muest enden dein junges leben,
Ich wil dich selb lebendig fahen
Vnd dich an ainen paumen hahen
Dir zv ewigem hon vnd spot. (549-53)

若僧よ、鍵は与えてやるが、
お前は若い命を終えねばならぬぞ。
それとも俺はお前を生かしておいて、
一本の木に吊して、
いつまでもお前を罵り、あざ笑うことにしようか。

この巨人の言葉なども韻文75詩節の「お前は傲慢ゆえに木に吊されるのを学ぶがよかろう」(Nun můst du lernen hangen / Vmb deynen vbermůt. 75,7-8) という巨人の言葉を言い換えたものであることは明白であり、さらにこれに答えて「神が私を護ってくれよう」(Vor dir wol mich pehůeten got! 554) と言うゾイフリートの言葉も、韻文76詩節中の「それは神が禁じるだろう」(Das sol dir Got verbieten. 76,1) に相応するものと考えてよいであろう。ともかくもこうして二人は互いに激しく打ち合うのであるが、ついに巨人は倒れて、命乞いをする件(くだり)も韻文とまったく同じである。否、それどころか、ゾイフリートが相手の傷を布で結びつけて、手当てさえしてやる件(くだり)もまったく同じ展開と言ってよい。今や巨人は命乞いの条件の一つであった竜の岩山への扉を教えて、こう語るのである。

Schaw, sichstw diese stauden dorten?
Da selb ist des gepirges pforten,
Darein get ein stigen warlich,
Wol acht klafter dieff vnter sich.

---

22) ただし、韻文70詩節に見られる「鎖かたびら」(Brinne) はこのハンス・ザックスの作品では省略されている。

Erst kumb wir zv der pforten gros,
Darfor ain starck eyseren schlos,
Das wil ich den aufsperen dir.
Ich folg dir, ge dw hin vor mir. (575-82)

見よ、あそこの灌木(かんぼく)が見えるか？
あそこが岩山への門なのだ。
その中に一つの道が確かに通じている。
およそ八クラフターほど下へ行ったところだ。
まず我々は大きな門に辿り着くが、
その前には丈夫な鉄の錠前がある。
その錠前を私は開けてやろう。
お前について行くから、俺の前を歩くのだ。

この巨人の言葉における「灌木(かんぼく)」(stauden, 575) は韻文では「岩の壁」(des staynes wende, 86,3) となっているが、およそ八クラフターほど下へ行ったところに扉があることは韻文99詩節の描写と同じである。こうして岩山に通じる扉の場所を聞いたゾイフリートは、喜び勇んで前に進む。巨人はゾイフリートのあとをついて行くが、巨人は突然剣を引き抜いて背後から襲いかかる。韻文と同じ展開であることは言うまでもない。しかもその際侏儒が「霧の頭巾」(die nebel kappen) をゾイフリートに投げかけて彼を助ける件(くだり)も韻文とまったく同様である。すなわち、巨人はゾイフリートを突き刺そうとするが、巨人の目にはゾイフリートの姿が見えないので、あわてふためく。こうして霧の頭巾で窮地を脱したゾイフリートが侏儒王から逃げることを勧められる場面（韻文93詩節）とともに、それをゾイフリートがきっぱりと拒否する場面（韻文94詩節）は、このハンス・ザックスの戯曲ではなるほど削除されているが、しかし、ゾイフリートが再度巨人に襲いかかり、再度巨人を倒してしまって、再度巨人が命乞いをして、その際次のような言葉を口にすることなどは、韻文の場合（韻文96詩節）とまったく同じである。

Schon meinem lebn, dw kůner degen,
Wůrgst mich, so mustw dich verwegen
Der schůnen junckfrawen, glaub mir;
An mich so kan kain mensch zv ir. (595-8)

お前、勇敢な勇士よ、俺の命を助けてくれ。
俺を殺せば、お前は美しい乙女のことを
あきらめねばならぬぞ。俺を信用しろ。
俺なしでは誰も彼女のところへは行けないのだ。

これに対してゾイフリートは「乙女の愛が私を強要して、私はお前を生かしておかねばならぬ」(Der junckfraw lieb, die zwinget mich, / Das ich mus lassen leben dich. 599-600) と言っているが、この言葉なども韻文97詩節中の「英雄ゾイフリートは自分を乙女へと強いた大きな愛について多く考え、巨人、不実な男を生かしておいた」(Darumb der held Seyfride / Het vil manchen gedanck / Wol von der grossen liebe, / Die jn zur mayde zwangk. / Er můst jn genesen lassen, / Den vngetrewen man. 97,1-6) という叙述を踏襲したものと言ってよいであろう。このようにゾイフリートが鍵をめぐって巨人クペローンと戦う場面は、なるほど巨人が不死身の英雄から受けた数多くの傷口から流れ出る赤い血の描写 (80詩節、95詩節) などは削除されてはいるが、しかし、その他の点では作者ハンス・ザックスは素材の韻文『不死身のザイフリート』をかなり忠実に踏襲しながら戯曲化していることが容易に理解できよう。ともかくも乙女救出のことを第一に考えてゾイフリートは、再度巨人の命を助け、巨人がついに竜の岩山へ通ずる道の扉を開けるや否や、今度は巨人に自分の前を歩かせて、グリームヒルト姫が捕らえられている岩山の頂上をめざして進んで行くのである。

第五幕

その岩山の頂上ではグリームヒルト姫がわが身の不幸を嘆いている (628-35)。そのうちに彼女はその螺旋(らせん)状の岩山へ登って来る人の足音を聞きつけて (636-7)、「ここへは四年目に至るまで人が来たことはないのに」(638-9) と言いながら、一体誰なのかと不思議に思う。この彼女の言葉からも彼女がこの岩山へ連れて来られてから四年が経過していることが明らかである。このように彼女が独り言を口にしているうちに、巨人クペローンの案内で不死身のゾイフリートが侏儒とともに到着する。乙女は明らかにゾイフリートを知っているので、韻文において見られたような両者の会話における矛盾は感ぜられない[23]。乙

23) 韻文ではその場面で交わされる両者の会話から、ザイフリートがギービッヒ王によって派遣された使者であるのか否かについては、はっきりとは読み取られえない。詳細は前掲拙稿：『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質 (徳島大学教養部紀要 —— 外国語・外国文学 —— 第4巻1993年) 144-5頁を参照されたい。

女はゾイフリートの姿を目に留めるや否や、十字を切って彼にこう語りかけるのである。

Ach, Sewfrid, wer pringt euch daher?
Ewer leben stet in gefer
Vor dem greulichen grosen trachen.
Der wirt sich gar pald zv her machen,
Die sun stet auf dem mitag grat;
Darumb flicht pald, das ist mein rat.
Solt euch widerfaren ein leit,
Das rewet mich meins lebens zeit;
Drumb flicht, sagt vatr vnd mueter mein,
Ich mues ewig gefangen sein,
Das man sich mein verwegen sol. (640-50)

ああ、ゾイフリート様、誰があなたをここまで連れて来たの？
恐ろしい大きな竜を前にして
あなたの生命は危険に晒されています。
竜はすぐに姿を現わすでしょう。
今は昼間で太陽が輝いています。
だからすぐに逃げなさい。これが私の忠告です。
あなたの身に災いが生じたら、
私は一生涯それを後悔します。
だから逃げて、私の父と母に伝えて下さい。
私はいつまでも囚われの身でいなければならないので、
私のことは断念されねばならないと。

このように岩山の頂上へ到着したゾイフリートに向かって、いきなり逃げることを勧めるグリームヒルト姫の言葉は、韻文にはどこにも見出されず、作者ハンス・ザックス独自の創作部分であると言えるが、さらにこの姫の言葉から、すでに夜は明けて太陽の輝く昼間であることが明らかにされている。登場人物の言葉を通じて時刻の経過を観客に知らせているのもこの戯曲作品の特徴の一つである。ともかくも危険だから逃げ出すように英雄が勧められる場面は韻文にはないものの、乙女と再会したゾイフリートは「神の助けでもって乙女を悪

竜から救い出すか、さもなければ死ぬつもりだ」(652-4) と決意のほどを伝える点などは韻文の場合 (103詩節) とまったく同じと考えてよいであろう。

そのあと巨人がゾイフリートに、この世でその剣以外には竜を倒せるものはないという名剣が地面にあることを教える件(くだり)についても、明らかに韻文107詩節を踏襲したものである。ゾイフリートはその名剣を取り上げようと身をかがめたところ、巨人はまたもやゾイフリートに背後から襲いかかる展開も韻文とまったく同じであれば、当然そのあとゾイフリートは剣を手に取って、三度も誓いを破った巨人を今度ばかりは許すことができずに山から突き落としてバラバラにしてしまう展開なども韻文とまったく同じである[24]。こうして巨人を片付けたあと、ゾイフリートは姫のところに戻って、優しくこう語りかけるのである。

Ach junckfraw, nun seit wolgemuet,
Ich hoff, es werd nun alles guet.
Verwegen meinen leib ich wag,
Vngessen pis an virden tag. (668-71)

ああ、姫よ、もう安心して下さい。
今やすべてがよくなると思いますから。
思い切って私は自分の命を賭けたのです。
四日目に至るまで何も食べずに。

このゾイフリートの言葉における「四日目に至るまで何も食べずに」(671) という表現も韻文117詩節中の「私は四日間何も食べず、何も飲まず、ほとんど休息もしていない」(Nun bin jch doch genesen /Biß an den vierdten tag / Vngessen vnd vntruncken, / Vnd keyner rhů nie pflag. 117,5-8) という叙述を踏襲していることは言うまでもない。これを聞いた侏儒は食べ物を調達すべく、一端その場を退く点なども韻文とまったく同じである。乙女はゾイフリートと二人きりになると、彼の苦労を称えながら、こう語る。

Ach, ewer zwkunfft ich mich frew.

24) ただし、この巨人との三度目の戦いは韻文においては格闘であったが、この作品では剣による戦いに変更されている。これなども戯曲化に伴う細かな改作の一つである。(Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.760.)

Ich danck euch aller lieb vnd trew,
Das ir vmb mein willen kumbt her
Vnd gebt euch in dodes gefer.
Nun, hilft mir got durch euch darfon
Haim zv lant, so wil ich euch hon
Fůer meinen elichen gemahel,
Mein trew euch halten fest wie stahel. (672-9)

ああ、あなたの到着を私は喜びます。
あなたが私のためにここまで来て下さり、
死の危険に身を晒(さら)していることに対して、
私はあなたにすべての愛と誠実を捧げます。
さあ、あなたによって神が私を
故郷へ帰して下されば、私はあなたに
結婚の約束をいたします。
鋼鉄のように堅い私の誠実を受け取って下さい。

韻文『不死身のザイフリート』では乙女がザイフリートと再会した場面（106詩節）で、すなわち、ザイフリートが巨人と戦う前に、このような誠実な言葉をザイフリートに伝えているのに対して、この戯曲作品では巨人を片付けたあとのこの場面に移されている。そのうち侏儒が菓子の入った黄金の皿を持って来て、それでもってゾイフリートを元気づけようとする。そこへ竜が飛んでやって来る。いよいよ竜との戦いであり、韻文とほぼ同じ展開であるが、この作品では戯曲化に伴って竜の接近する様子は乙女によって語られている。

O, ich hůr den trachen weit dawsen
Hoch in den lůeften einher sausen
Ser vngestům vnd vngehewr,
Vnd speit aus seinem rachen fewr.
Darumb fliecht, werder helde, ser,
Oder stellet euch zw der weer. (688-93)

ああ、竜があそこの高い空から
音を立ててこちらへ来ているのが聞こえるわ。

とても狂暴で恐ろしい竜で、
口からは火を吐いているわ。
だから、気高い英雄よ、すぐに逃げて下さい。
さもなくば、防いで下さい。

侏儒は接近してきた竜を恐れて洞穴に逃げ込むが、同時にゾイフリートも乙女の助言（698-701）で竜の吐く有毒の煙がなくなるまで、乙女とともに一端洞穴の中へ逃げ込むことにする。しかし、韻文ではこの洞穴に逃げ込むのは竜と戦っている最中のことであり、しかも韻文の英雄はまさにこの洞穴で財宝を見つけるのであるが、ハンス・ザックスの戯曲作品ではこの財宝のエピソードは跡形もなくすっかり削除されている。この財宝エピソードの削除に伴って当然そのあとの筋立てに若干の改作が施されているが、それらについてはその箇所で指摘することにしよう。

このようにハンス・ザックスは財宝のエピソードを削除していれば、同様に竜との戦いそのものをも簡略化している。韻文では洞穴での財宝発見及びその財宝にまつわる小話をも含めて竜との戦いは実に124詩節から148詩節にわたって詳しく語られているのに対して、この戯曲では岩山に戻って来た竜とゾイフリートとの戦いの場面は701行のあとのほんの数行のト書で簡単に語られているだけであり、戯曲化に伴う改作点であることは言うまでもない。戦いの末、ゾイフリートが竜を倒して投げ落としてバラバラにする場面も同様にその同じト書の中で済まされている。こうして巨人に続いて竜をもゾイフリートは片付けたのであるが、このたびの竜との戦いではその英雄自らも失神して倒れてしまう点は韻文と同じである。しかし、そのあとの展開には若干改作が施されている。すなわち、韻文ではザイフリートは非常な熱さと疲れのあまり気絶してしまったものの、長い間横たわっていると再び生気が蘇ってきて、自力で起き上がり、それから彼は愛しい乙女を探したところ、彼女がその場に死んだように痛ましくも倒れているのを見て、激しく嘆く（150詩節）のである。これに対してハンス・ザックスの戯曲では乙女が倒れる場面はなく、逆に彼女は倒れているゾイフリートに近づき、彼の頭を自分の膝に置いて、次のように嘆く。

Nun mů̊es es got geclaget sein,
Ist abgeschiedn die sele dein
Vor mů̊ede vnd groser amacht!
Mein lieb dich in den vnfal pracht. (702-5)

今や神に嘆かないではいられない。
あなたの魂は、疲労と失神のあまり、
失われてしまったのだから！
私のためにあなたは災いを被ったのです。

韻文『不死身のザイフリート』とハンス・ザックスの戯曲では嘆く人物が入れ替わっていることが明らかであるが、しかし、その倒れている人物を助けるのは、韻文でも戯曲でも同じように、侏儒王の差し出す薬草である。すなわち、戯曲では嘆いている乙女のところに侏儒がやって来て、こう言うのである。

Ach junckfraw, der helt ist nit dot,
Er ligt in amacht groser not.
Gebt im nur dieser wuerzel ein,
So wirt er zv im kumen fein. (706-9)

ああ、乙女よ、英雄は死んでいるのではありません。
彼は失神して倒れているだけです。
彼にこの薬草を与えなさい。
そうすれば、彼は正気を取り戻すでしょう。

この侏儒王の言葉が、韻文では侏儒がザイフリートに言う言葉「乙女がすぐ健康になるよう、彼女に薬草を与えよう」(151,7-8) の代わりであることは明白である。要するに、薬草を食べるのは、韻文では乙女であるが、この戯曲では英雄の方であり、ともかくも乙女はこうしてゾイフリートに薬草を与えると、ゾイフリートは生気を取り戻し、乙女は抱きしめて彼に口づけして、自分を悪竜から救い出してくれたことに感謝の言葉を述べるのである。

ゾイフリートの悪竜退治はこのように乙女救出を意味し、それは同時に乙女との結婚をも意味しているが、しかしそれだけではなく、さらには侏儒一族解放をも意味していることは韻文の場合と同様である。すなわち、侏儒はゾイフリートに感謝の念を示しながら、こう語るのである。

Auch habt ir erlost gleicher weis
Mich vnd mein hoffgsind in dem perg.
Ich pin ain kůng vbr dawsent zwerg;

Vns peyzwang der ries Kuperon,
Das wir im mustn sein vnterthon.
Nun sint wir auch ledig vnd frey,
Got vnd euch preis vnd ere sey! (715-21)

あなたは同じ方法で
私や山中の私の一族を救い出してくれたのです。
私は千人の侏儒たちの国王です。
巨人クペローンは私たちを制圧していたので、
私たちは彼に従わねばならなかったのです。
今や私たちもまた自由の身となったのです。
神とあなたに賞賛と名誉がありますよう！

この侏儒王の言葉が韻文153-4詩節を逐語的に踏襲したものであることは、一読して明白であるが、韻文155詩節において侏儒が食事とワインでもてなす場面や、韻文156詩節において侏儒王がその父ニープリンゲ(Nyblinge)の死を知らせる叙述は、ハンス・ザックスの作品では削除されている。しかし、そのあと侏儒王がその感謝の気持ちから道案内を申し出る件(くだり)は、若干の変更は見られるものの、韻文とほぼ同様であると言ってよいであろう。

こうしてゾイフリートは今や侏儒王の道案内でグリームヒルト姫とともにライン河畔のヴォルムスへと急ぐのであるが、その途中、ゾイフリートがその侏儒王に自らの運命を質問するのも韻文とほぼ同様である。

Die weil dw hast des gstiren kunst,
So sag dw mir aus trew vnd gunst,
Wie es mir gen, vbl oder wol,
Vnd wie lang ich auch leben sol,
Auch wie ich nemen werd ain ent. (734-8)

君は占星術を知っている限りは、
誠実と好意から私に教えてほしい。
私はどうなるのか、凶か吉か。
そして私はどのくらい長く生きられるのか。
また私はどのような最後を迎えるのか。

この質問の言葉が韻文160詩節に由来することは明らかであり、これに対して侏儒が次のように答える言葉も、明らかに韻文でそのあとに続く161-2詩節の叙述を踏襲したものである。

Das firmament nichs guts erkent.
O kůner helt, dw rewest mich,
Das stiren, das zaiget auf dich,
Dir wert die junckfraw zum weib geben,
Pey der werstw nur acht jar leben.
Nach dem werstw im schlaff erstochen,
Das doch auch entlich wirt gerochen
An den vntrewen mȯrdern dein. (739-46)

天空は何もよいものを示してはいない。
ああ、勇敢な英雄よ、君はあわれだ。
星が君に示しているところによると、
この乙女は君の妻となるだろうが、
君は妻のもとで八年しか生きられないのだ。
その後君は眠っているときに刺殺されるだろう。
そのことはしかし不実な暗殺者たちに対して
いつか復讐されるだろう。

この侏儒王の占いの言葉は、「眠っているときに」(im schlaff, 744) という表現 —— これに関してはあとで述べる —— を除けば、韻文の叙述をかなり忠実に再現していることが明らかである。しかし、そのあとの部分に関しては作者ハンス・ザックスはかなり大胆な改作を施している。すなわち、韻文では上記のような予言を占ったあと、侏儒は自らの山へ帰り、一方ゾイフリートは洞穴で発見していた財宝のことを思い出して、岩山へ引き返し、その財宝を運び去るのであるが、これらすべてのエピソードはこの作品では削除されている。これは、すでに上で述べたように、竜との戦いの最中における洞穴での財宝発見のエピソードを跡形もなく削除したことに伴う改作である。従って、その財宝をやがてライン河へ沈めるエピソード（韻文 167詩節）もこの作品では削除されている。改作点はその財宝のエピソードだけにとどまらず、侏儒が占いのあと自らの山へ帰らずにライン河畔のヴォルムスまで随行することになっている点

もハンス・ザックスの戯曲における大きな改作点と言えよう。ただこれは韻文169詩節で「ギービッヒ王のところへ高貴な使者が遣わされた」(169,1) という叙述と関連させて[25]、ハンス・ザックスはその高貴な使者に侏儒をあてたとも考えることができよう。

改作はさらにゾイフリート一行がライン河畔ヴォルムスの宮廷に到着した場面でも認められる。ギービッヒ王は伝令官とともに登場して、次のように嘆く。

Ach got, erst pin ich ellent gar,
Weil ich pis in das virde jar
Mein dochter Grimhilt hab verlorn,
Die von eim wurm hin gfüert ist worn,
Die ich vileicht sich nimer mer.
Das kumert mein gmahel so ser,
Das sie auch starb vor herzenlaid.
Also hab ichs verloren paid. (750-7)

ああ、神よ、私はまったくあわれだ。
なぜなら、私の娘グリームヒルトを失って、
もう四年にもなるのだから。
娘は竜に連れ去られ、
恐らくはもう娘に会えはしないのだ。
そのことが私の妻をいたく悲しませ、
妻もまた悲しみのあまり死んでしまった。
だから私は二人を失ったことになるのだ。

このギービッヒ王の言葉からも姫が誘拐されてから四年の歳月が過ぎていることが明らかであるが、韻文と異なる点はその四年のうちに母后が娘のことを気遣うあまり死んでしまっていることである。韻文には見出されないこの母后の死は、それだけグリームヒルト姫の誘拐が両親にとってはつらいものであったことを示すとともに、ゾイフリートによって果たされた娘の帰国がそれだけに父のギービッヒ王にはうれしいものであったことを強調していると言えよう。事実、侏儒が到着し、無事娘が帰還した旨を伝えると、国王は大喜びで、「これ

25) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.515.

ほどうれしい知らせは聞いたことがない」(763-4) と国王自身、語っている。国王はただちに出迎える準備をさせようとするが、その必要はない。娘とゾイフリートはすでに下の城に到着しているというのである。こうしてまもなくゾイフリートがグリームヒルトを伴って国王の広間に入ると、国王は彼らを出迎え、娘を抱きしめて、これまでの心痛と母の死を告げると、今度はゾイフリートの手を握って、出発前に約束していた通り、娘婿になってほしいと告げる。さらに国王はゾイフリートがいかにして娘を悪竜から救い出したのか、その英雄譚を語ってほしいとも言う。ゾイフリートはいずれそのうち詳しく物語ることを約束して、今はただ休息を願い出るだけである。国王は承知し、翌日結婚式を盛大に執り行う旨を伝えたあと、一同はその場を立ち去るのである。このように第五幕の後半、すなわち、竜退治によってグリームヒルト姫を救い出したあとの筋立ては作者ハンス・ザックスによってかなりの改作が施され、巧みに戯曲化されていることが今や容易に理解されるであろう。

第六幕

以上、第一幕から第五幕まで順を追ってハンス・ザックスの戯曲の展開を見てきた限りでは、この戯曲作品は、多少改作を施されているにせよ、大筋においては韻文『不死身のザイフリート』とほぼ同じ展開であると言ってよいであろう。素材として『ニーベルンゲンの歌』の影響も多少認められるが、主な素材としては韻文『不死身のザイフリート』を用いていることは明白である。ところが、第六幕になると韻文『不死身のザイフリート』や『ニーベルンゲンの歌』にはまったく見出せない別のエピソードが取り入れられている。ライン河畔ヴォルムスのバラ園で展開されるゾイフリートとディートリヒ・フォン・ベルンとの間の決闘がそれである。この決闘は中世後期の英雄文学によく見られるものであるが、このハンス・ザックスの戯曲ではその決闘はいかにして行われることとなったのか、その次第と決闘の経過及びその結末を順に見ておくことにしよう。

まずゾイフリートがディートリヒ・フォン・ベルンと決闘することとなったきっかけは、今やゾイフリートの妻となったグリームヒルトが、竜の岩山から自分を救い出してくれた夫の勇敢な力をほめ称えながら、そのような力をどこから得たのかと夫に尋ねた (799-811) ことに始まる。夫のゾイフリートは「十二人分の強い力」でもって竜を打ち倒してその角質で不死身となった次第を語った (812-22) あと、「この世で私に匹敵するような者はいまい」(825) と言って自らの自慢話を締め括ったのに対して、妻のグリームヒルトは次のように語るのである。

Sagt man doch von aim helden wert,
Der wan zv Peren im Welschland,
Der selb herr Dietrich sey genand,
Hab auch erschlagen vil der recken,
Den kůnig Fasolt vnd den Ecken,
Die Růez vnd auch ries Sigenot. (826-31)

でも一人の気高い英雄について人は噂しているわ。
その英雄はロマンス語地域のベルンに住んでいて、
ディートリヒという名前で、
彼もまた多くの勇士たち、
ファゾルト王やエッケ、
リュエーツや巨人ジゲノートなどを殺したそうよ。

ゾイフリートもこのヴェルシュ・ベルン (Welsch-Bern, イタリアのベローナ) の英雄の武勇については聞き及んでいて、是非とも彼と戦って自分の力を試してみたい (832-5) と言い出す。そこでグリームヒルトはさっそくそのベルンの勇士とその武術の師匠ヒルトプラントをこのライン河畔ヴォルムスのバラ園に招待するため、彼女の従兄弟プラバント公爵 (herzog aus Prabant)[26] を使者として遣わせることとなるのである。ここで補足的にグリームヒルトの父ギービッヒ王が登場して、彼はその旨を伝え聞いて、それがよい結果をもたらすか否かは分からぬが、自分としてはそれを実現し、監視せねばならなぬと言って立ち去る。

一方、使者を通じて決闘の申し込みを受けたディートリヒ・フォン・ベルンは、ただちに武術の師匠、老ヒルトプラントに相談して (871-9)、師匠の随行の意志をも受け取ると、ライン河畔ヴォルムスへ出かける決意をして、今日中にも出かけるべく、準備をさせる。

さて、ベルンの客人を待ち受けるグリームヒルトとゾイフリート側では準備も万端ととのい、妻は客人を待ち受けながら、次のように語る。

All ding verornet ist aufs pest.

---

26) ただし、この人物は名前だけが三箇所 (850行、859行、873行) で挙げられているのみで、実際には舞台には登場しない。

Kemen nur pald die werden gest!
Wan ich der zeit kaum kan erwarten,
Wie ir paid in dem Rosengarten
So riterlichen werdet kempfen.
Thustw mit kampf den Perner dempfen,
So wirt dein lob erhöhet werden
Vber all held auf ganzer erden. (891-8)

すべてのものがきわめてよく整えられました。
すぐに気高い客人たちが来て下されればよいのに！
あなた方二人がバラ園で
騎士らしく戦う時がくるのを
私はほとんど待てないくらいですもの。
あなたが戦いでベルンの人に打ち勝てば、
あなたの賞賛は全世界の
すべての英雄にもまして高められましょう。

これに対して不死身のゾイフリートは「私もそのように終わるのを望んでいるが、すべては神の御手の中。勝利は運命次第」(899-901) と言って、神に帰依する態度を窺わせながら、ひとまず部屋で待機することにして、その場を退く。

やがてその場にベルンの客人が到着し、グリームヒルトに歩み寄って挨拶をすると、グリームヒルトは客人の手を取って語る。

Ja, mein edler Dietrich von Pern,
Durch diesen kampff wil ich pewern,
Ob ir oder mein gmahel wert
Der künest helt sey auf der ert;
Dem selben von mir werden mus
Ein vmefang vnd süeser kues
Vnd auch ein rosen krenzelein. (909-15)

ええ、気高きディートリヒ・フォン・ベルン殿、
この戦いで私は試したく思います。
この世で最も勇敢な英雄は

あなたか、それとも私の貴い夫なのかを。
勝者には私によって
抱擁と甘い口づけ、
さらにバラの冠も与えられることでしょう。

これに答えてディートリヒ・フォン・ベルンは戦いを宣言し、彼女の主人ゾイフリートにもその旨を伝えさせる。こうしてグリームヒルトは夫ゾイフリートを呼びに部屋の中へ入って行くのであるが、その場に居残ったディートリヒ・フォン・ベルンは突然決闘の成り行きを心配し始めて、武術の師匠ヒルトプラントに弱音を吐いて、こう言う。

Izund thuet mich pey meinen trewen
Des kampfs zvsagen haimlich rewen,
Die weil Sewfrid ganz hůrnen ist,
Das ich forhin nit hab gewist.
Darumb wolt ich von herzen gern,
Ich wer wider da haim zv Pern. (919-24)

今や誠実にかけて私は
決闘を承諾したのを密かに後悔している。
ゾイフリートはすっかり不死身なのだから。
私はそのことを先ほどまで知らなかったのだ。
だから私は心から望むのだが、
再び故郷のベルンへ帰りたい。

相手が不死身の皮膚をしていることを聞き知ってこのような弱音を吐く主君ディートリヒに向かって、老ヒルトプラントは「何と恥ずかしくも臆病な人か」(925) と言いながら、主君をひどく罵る。この嘲笑と罵りにディートリヒは怒りを示して、剣を引き抜き、ヒルトプラントを打ちのめして、そこを立ち去って行く。ところが、老ヒルトプラントがこのように主君を罵ったのも決して理由のないことではなかった。グリームヒルトも招待の使者を遣わせる前に言っているように、老ヒルトプラントは「口と手に関しては策略家で、彼はベルンの人に知識と教えを授けて、ベルンの人が戦いに勝つよう仕向けるすべを心得ている」(840-2) という人物なのである。この場面でも臆病風に吹かれた主君

を罵ったのにもそれなりの魂胆があったのであり、主君から打ちのめされたあと立ち上がると、一人こう語ってそれを明かすのである。

Mein herren ich erzůernet hab,
Der ein so harten straich mir gab.
Ich habs nit on vrsach gethon,
Den kampf er dardurch gwinen kon. (933-6)

私の主君を私は怒らせてしまった。
主君は私にひどい一撃を加えた。
私は理由なしでそれをしたのではない。
主君はそれによって戦いに勝つことができるのだ。

ともかくこうしていよいよゾイフリートとディートリヒとの決闘の時が来た。妻グリームヒルトはバラ園の中にすわって観戦しようとしている。夫ゾイフリートは武装して、あちこち歩き回りながら、相手の登場を待ち受けるが、相手はなかなか現われない。さては臆病風に吹かれたかな (942) と思っているうちに、ついにディートリヒは現われて、戦いが始まった。ゾイフリートはベルンの人をグルグルと回して、優勢に戦いを進めている。そのさまをこっそりと眺めていたヒルトプラントは密かに伝令官に頼んで、自らが息を引き取ったという嘘報を主君ディートリヒに伝えさせる。それを聞いたディートリヒは怒りを示しながら、こう叫ぶ。

Ist dot der wappenmaister mein,
Den ich erschlueg von wegen dein,
Sol es dir auch nit pas ergon.
Wer dich mein, erst pin ich ain mon
Vnd ergrimet in meinem zorn,
Dw must sterben, werst lauter horn. (959-64)

私はお前のせいで武術の師匠を打ちのめしたのだが、
その武術の師匠が死んだのなら、
お前にもよいことは起こるまい。
私の攻撃を防ぐがよい。ようやく私は男となり、

怒りで力が出てきたのだから。
不死身の英雄よ、お前は死なねばならぬ。

こうしてディートリヒ・フォン・ベルンは怒りで力を呼び起こして、今までの劣勢を巻き返し、不死身の英雄ゾイフリートを後退させて、ついには相手をその妻の膝に追い詰める。妻グリームヒルトは追い詰められた夫の上に薄い布を投げかけて、ディートリヒに向かって、こう言う。

Perner, pist ein thuegenthaft mon,
So wirstw hewt geniesen lon
Meinen herren der freyheit gros,
Weil er mir ligt in meiner schos.
Verschan seins lebens im allein,
Er sol nun dein gefangner sein. (965-70)

ベルンの人よ、あなたは徳高き勇士です。
ですから、今日のところは私の主人を
自由にさせて下さい。
主人は私の膝に倒れているのですから。
どうか彼の生命(いのち)を助けて下さい。
主人は今やあなたの捕虜となりましょう。

このような妻の懇願にもかかわらず、相変わらずディートリヒは激しい怒りを示しながら、その頼みを拒否する。というのも、彼の師匠は死んでしまったのだから、ゾイフリートも生かしてはおけぬ (972-3) と主張するのである。ここではゾイフリートが不死身であることがいつの間にか忘れ去られているように見えるが、それはともかくディートリヒが剣を引き抜き、ゾイフリートにとどめを刺そうとした瞬間、老ヒルトプラントが飛び出して来て、こう語る。

Mein herr Dietrich, last ewren zorn,
Ich pin wider lebentig worn,
Hab mein dot dir kund lasen thon,
Darmit dein zoren zůndet on,
Das von dir ging fewer vnd dampff,
Dardurch dw oblegst in dem kampff. (975-80)

わが主君ディートリヒ殿、怒りをしずめなされ。
私は再び生き返ったのだから。
私が死んだことをあなたに知らせたのは、
あなたの怒りに火をつけ、
あなたの中から火と蒸気が出てきて、
それによってあなたが戦いに勝つよう仕向けるためだったのです。

このように老ヒルトプラントは巧妙な策略でもって主君ディートリヒに勝利をもたらせたのであるが、そのディートリヒは自分の武術の師匠がまだ生きていたことを喜び、神に感謝する。それのみならず、さらに彼は追い詰めていた相手のゾイフリートの手を取って、立ち上がらせたので、ゾイフリートもそのディートリヒの誠実と友情に感謝の念を示す。一方、決闘が平穏無事に終わったことを見届けたグリームヒルトは、ディートリヒの手を取って、勝利の褒美としてバラの冠と抱擁と口づけを与える。このような栄光に浴したディートリヒは、このたびの決闘に満足しつつ帰国の旨を伝えると、それに対してゾイフリートはその帰国の旅に伴の者をつけることを伝えるとともに、二人の間の友情を互いに親しく語り合うことを誓う。こうして決闘は友情をもたらし、全員、その場を立ち去って、第六幕は終わる。

以上のようなゾイフリートとディートリヒとの間の決闘のエピソードがこのハンス・ザックスの戯曲第六幕に挿入されているのであるが、この決闘エピソードは韻文『不死身のザイフリート』にも『ニーベルンゲンの歌』にも見出されず、作者ハンス・ザックスはここでそのほかの素材を用いていることが明らかである。その素材としては一般に『ヴォルムスのバラ園』(Der Rosengarten zu Worms) が推定されている[27] が、作者ハンス・ザックスはその素材についてどの手本に従い、それをどのように取り扱ったのか、その辺の詳しい事情に関しては残念ながら本稿では未解決のままにしておかざるをえない。ただここで一つ確かなこととして言えるのは、作者ハンス・ザックスは韻文『不死身のザイフリート』172詩節で語られている結婚式の際の騎士たちの競技の代わりとして、このゾイフリートとディートリヒの決闘を挿入している[28] ということで

27) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.765-8.
28) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.766. ちなみに、のちに十七世紀の民衆本の作者はこの場面で英国詩人フィリップ・シドニー (Philip SIDNEY, 1554-86) の小説『アーケイディア』(Arcadia) のドイツ語訳から二人の臆病者の決闘を挿入していることを参考のため付け加えておこう。

あろう。あるいはゾイフリートの結婚から暗殺までの八年間の空白を埋めるためにこの決闘を挿入したと言ってよいかも知れない[29]。いずれにしてもこの第六幕から言えることは、作者ハンス・ザックスはゾイフリートとディートリヒの決闘に関する知識をも明らかに入手していたということであり、またそれは古くから『ティードレクス・サガ』などにも見出されたこの二人の決闘エピソードがハンス・ザックスの時代にも多かれ少なかれ流布していたことを明らかに示していると言ってもよいであろう。

第七幕

このように第六幕では別の素材が用いられているのであるが、第七幕に入ると、再び韻文『不死身のザイフリート』が素材に用いられて、韻文173-9詩節の主題である八年後のゾイフリートの暗殺が取り扱われている。その暗殺への動機もほぼ韻文の場合と同じであり、ギービッヒ王の息子たち、すなわち、グリームヒルトの三人兄弟の嫉妬によるものとされている。ただ韻文では長男がギュンター (Günther)、次男が残忍なハーゲン (der grymmig Hagen)、そして三男がギールノート (Gyrnot) であったのに対して、この戯曲では次男と三男が入れ替わって、ゲールノート (Gernot) が次男、ハーゲン (Hagen) が三男となっている。まず長男ギュエンター (Gůenther) は、今や妹グリームヒルトの夫としてヴォルムスの宮廷で威勢を振っているゾイフリートについて、こう語る。

Hort zv, ir lieben průeder mein,
Wir sint verachtet gar allein
Von vnsrem schwager, dem Sewfrid,
Der achtet vnser aller nit.
Vnser schwester hat in erwelt,
Mit schmaichlerey er sich auch helt
Zw Gibich, vnserm vater alt,
Vns sůn vertringet mit gewalt. (1004-11)

よく聞け、わが親愛なる兄弟たちよ。
我々は義兄弟ゾイフリートによって

29) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.766.

すっかり侮(あなど)られてしまっている。
彼は我々皆を尊敬していないのだ。
我々の妹は彼を婿に選び、
彼は嘲笑しつつ
我々の老父ギービッヒに対して振舞い、
我々息子を力ずくで押し退(の)けているのだ。

この長男ギュエンターの言葉が韻文173-4詩節におけるギュンターの言葉を踏襲していることは、一読して明らかである。次男ゲールノートも同じような嫉妬を示しながら、父王の亡きあとの支配権を心配して、こう語る。

Ir průeder, sey wir nit so kůen,
Das wir diesen Sewfrid austreiben,
Lassen also zv hoff in pleiben
Mit solchem gwaltigen anhang?
Es sey geleich kurz oder lang,
Stirbt vnsr her vater in den mern,
So wirt er gewies kůnig wern;
Wan er hat schon in seiner hent
Wol halb das kůnclich regiment.
Rat, wie man dem fůrkumen sol. (1015-24)

兄弟たちよ、我々は勇敢ではないので、
このゾイフリートを追い出すこともできない。
だからといって、そのような強力な味方を抱えた彼を
宮廷にとどまらせておくのか？
遅かれ早かれ、
我々の父君はそのうちに亡くなるだろう。
そうしたら彼はきっと国王になりたがるだろう。
というのも、彼はすでに国王の支配権を
ほぼ半分も手中に収めているのだから。
彼をどうしたらよいか、教えてくれ。

このゲールノートの言葉が韻文176詩節におけるギールノートの言葉に由来す

ることは明らかである。これに対して三男のハーゲンがゾイフリート暗殺をほのめかして、次のように提案するのも、韻文175詩節を踏襲しているものと考えてよいであろう。

Er ist nit auszwtreiben wol,
Die weil er vnser schwester hat;
Ob im helt kůncklich mayestat.
Wie, wen vnsr ainer an der stet
In ain kampf in auf fordern thet,
Vnd das sich den da glůeck zv trůeg,
Das ainer in im kampf erschlůeg?
So kům wir sein mit eren ab. (1025-32)

彼は我々の妹を妻にしている限り、
追い出すわけにもいかない。
彼には王者たる風格が漂っている。
我々のうちの一人がただちに
彼をなにがしかの戦いに誘い出して、
彼の幸運を欺いて、
戦いの最中に彼を打ち殺してはいかがだろうか？
そうすれば我々は名誉を保って彼を片付けられるのだが。

三男ハーゲンの口からこのような暗殺計画を聞くや否や、長男ギュエンター自身も「それを考えていた」(1033) と言って同意するが、「一体誰が彼と戦って、彼を倒すことができるのか。彼は上下も前後も角質の皮膚をしているのだ」(1034-7) と説明して、暗殺実行のむずかしさを指摘する。しかし、そのあとに続けて「ただ二指尺の幅の肩の間だけは傷つけられうる」(1038-40) と付け加えて、英雄ゾイフリートにも付け込む弱点はあることを明らかにする。

次男ゲールノートも長い間それを考えていたと言い、「ゾイフリートはいつも昼に森へ散歩に出かけて、冷たい泉のそばの草地で、美しい花の中に横たわって、一人でうたたねしたりする」(1042-7) と聞いているので、そのときこっそりと彼を突き刺して、それを殺人者たちの所為(せい)にしてはどうかともちかける。この暗殺の場所と状況について韻文『不死身のザイフリート』では「オーデンの森の冷たい泉」(177,6-8) で、「泉に口と鼻を浸して涼をとっていたとき」

(178,3-4) と語られているのに対して、この戯曲では「冷たい泉のそばの草地で、美しい花の中に横たわって、一人で眠っているとき」(1045-7)とされているのは、作者ハンス・ザックスの付加表現と考えてよいであろう。しかもその「眠っているとき」という状況については特に北欧伝承から借用した[30] というわけでもなく、「泉のそばの草地」や「美しい花」がイメージされたならば、作者ハンス・ザックスにはすぐさま容易に「眠り」が思いついたのであろう[31]。その際「草地の美しい花」などについては恐らく『ニーベルンゲンの歌』988詩節や998詩節における草花の表現が作用したのであろう。このように暗殺の描写に際しては、韻文『不死身のザイフリート』── 暗殺に関してはほとんど明らかには語られていない── よりは、むしろ『ニーベルンゲンの歌』における描写を作者ハンス・ザックスは頭に思い描いていたと考えてもよいのではあるまいか。

三男ハーゲンが上記のゲールノートの提案を受け入れて、自らがゾイフリートを突き刺す役目を引き受けるのも、多少の違いはあれ、『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じ展開である。そこでギュエンターの声で三人兄弟は指を抜き身の剣の上に置いて誓いを交わす。ハーゲンは「暗殺を今日中にも実行するが、皆、それを黙っておくことにしよう」(1059-61) と言って、皆、その場を立ち去る。

さて、その不死身のザイフリートは今や王の衣服を身につけて、森にやって来て、泉のそばの草地に横たわって、静かに休んでいる。そこへ三人兄弟はやって来て、そのうちの一人ハーゲンが忍び寄ってゾイフリートの肩の間を突き刺す。ゾイフリートは少しよろめいたあと、静かに倒れて死ぬが、この暗殺の場面は1067行のあとのト書で簡単に済まされている。暗殺を実行したハーゲンはゾイフリートの死を殺人者たちの所為(せい)にして、それを猟師が発見したのだと報告することにするが、このハーゲンの言葉などは『ニーベルンゲンの歌』1000詩節における下手人たちの密談の言葉に由来するものと考えてよいであろう。その後ゾイフリートを城まで運んで帰るのも『ニーベルンゲンの歌』と同じ展開である。

妻グリームヒルトは伝令官と猟師とともに登場して、愛する夫が冷たい泉のそばで倒れた (1074-6) ことを聞いて、そうではないことを望み (1077) ながら、覆われていた小枝を取り除いてみると、それはやはり夫ゾイフリートであ

---

30) 例えば、『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズは床の中で休んでいるときに、グットルムによって剣で突き刺されることになっている。(拙著:『ニーベルンゲンの歌』── 構成と内容── 郁文堂1992年34-5頁参照)

31) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.773.

った。この場面も『ニーベルンゲンの歌』における同様の描写を彷彿させる。彼女は嘆き悲しみ、彼の上にくずおれ、抱きしめ、口づけをして、こう叫ぶ。

Ach dw herz lieber gmahel mein,
Der dw aus trew das leben dein
Vůr mich gewaget hast in dot,
Das dw mich lösest aus der not!
Verfluechet sey die mördisch hent,
Die dich ermördet an dem ent,
Die dich hat in dem schlaff erstochen.
Wilt got, es pleibt nit vngerochen. (1080-7)

ああ、愛するわが夫よ、
あなたは真心から私のために
自らの命を死の危険に晒して、
私を苦境から救い出してくれたのに！
暗殺した者は呪われよ。
あなたを最後に殺し、
眠っているあなたを突き刺した者は。
神が欲せば、復讐されないではいまい。

この妻グリームヒルトの復讐の意志についても、韻文『不死身のザイフリート』には欠けており、『ニーベルンゲンの歌』1012詩節に由来するのは疑いない。妻グリームヒルトは死せる夫を見つめながら、最後の言葉としてこう言う。

Der tholich noch da liegen thuet,
Der ist gerőt mit seinem pluet;
Er ist Hagen, des prueders mein,
Der wirt meins gmahels mőrder sein
Sambt seinen průedern, die im an mas
Haben tragen gros neid vnd has
Von wegen tuegent vnd redlikeit,
Der er sich hilt zv aller zeit,
Hilt auch die stras sawber vnd rain,

Straffet das vnrecht gros vnd klain.
Dis mort wil ich vor meinem ent
Rechen mit meiner aigen hent
An mein průedern, solt ich drum sterben,
So můesens auch am schwert verderben. (1088-101)

死人はまだそこに横たわっている。
彼は血で赤く染まっている。
私の夫を暗殺したのは
私の兄ハーゲンで、兄弟たちと一緒に
なしたことだ。兄弟たちは夫に対して限りなく
大きな嫉妬と憎悪を抱いていた。
夫がいつも身につけていた
美徳と実直のゆえに。
夫はまた街道筋を清らかにきれいに維持し、
不正を大小にかかわらず裁いてもいた。
この暗殺に対しては私が死ぬ前に
自らの手で私の兄弟たちに
復讐してやろう。そのために私が死ぬことになれば、
戦いもすべて破滅に終わるであろう。

下手人がハーゲンで、兄弟たちと一緒になした仕業だとグリームヒルトがすぐに悟る場面も『ニーベルンゲンの歌』1046詩節に由来することは明らかであり、また上記引用の最後の言葉も『ニーベルンゲンの歌』の最終場面をほのめかしていると言ってもよいであろう。しかし、「大きな嫉妬と憎悪を抱いていた」(1093) という表現や「街道筋を清らかにきれいに維持し、不正を大小にかかわらず裁いてもいた」(1096-7) という表現は、それぞれ韻文『不死身のザイフリート』177詩節と173詩節の叙述に由来するものであることを考え合わせると、この最終場面では『ニーベルンゲンの歌』と韻文『不死身のザイフリート』を混ぜ合わせながら、作者ハンス・ザックスは自らの作品を作り上げていると言ってよいであろう。ともかくも『ニーベルンゲンの歌』の最終場面をも彷彿させるような残忍な復讐の意志を明らかにしたあと、妻グリームヒルトは夫の遺骸を運んで、王者にふさわしく埋葬させる旨を伝える。彼らは死人を運び去り、グリームヒルトは悲しそうにそのあとをついて行くのである。

そのあと登場人物が皆整列し、伝令官が全体を要約するかたちで主な登場人物の性格について教訓的・道徳的な戒めを行なっている。それによると、まず第一にジークムント王は始末に負えない息子の行く末を心配する父親、第二に若きゾイフリートはよい躾(しつけ)も美徳も具えておらず、大胆で、厚かましく、向こう見ずにさまざまな危険を冒す腕白者、第三に侏儒は奉仕する誠実な男、第四に巨人は移り気で、不実な策略を用いる男、第五に竜はのちには自らも同じ報いを受ける冒瀆と暴力の権化、第六にディートリヒ・フォン・ベルンは名誉を求めて努力し、公正で、実直で敬虔な主君、第七に老ヒルトプラントは主君に忠告を与える誠実な宮廷人、第八にグリームヒルトは多くの災いの原因となる高慢なものへの情熱を駆り立てる女性、そして最後第九にその兄弟たちは嫉妬と憎しみを抱いて、多くの災難をひき起こす人物として性格づけられている。「これらの災難から神が我々を護ってくれるようにとハンス・ザックスは願っている」(1142)と伝令官が締め括ったところで、この不死身のゾイフリートの物語はすべて終了する。

なお、作者ハンス・ザックスはそのあとに続けて登場人物十七名を書き留めているが、その十七名とは次の通りである。

1. 伝令官 (Der herolt)
2. ニーデルラントのジークムント王 (Kůnig Sigmund)
3. その息子、不死身のゾイフリート (Der hůernen Sewfrid)
4. ディートリープ (Dietlieb) } 王の顧問官
5. ホルトリープ (Hortlieb) } 王の顧問官
6. ライン河畔ヴォルムスのギービッヒ王 (Kůnig Gibich)
7. その国王の娘グリームヒルト (Grimhilt)
8. ディートリヒ・フォン・ベルン (Her Dietrich von Pern)
9. その武術の師匠ヒルトプラント (Hiltprant)
10. 侏儒王オイグライン (Kůnig Ewglein, der zwerg)
11. 巨人クペローン (Kuperon, der gros ries)
12. 火を吐く悪竜 (Der fewer speyent verkert trach)
13. ギュエンター (Gůenther) } 三人兄弟
14. ゲールノート (Gernot) } 三人兄弟
15. ハーゲン (Hagen) } 三人兄弟
16. 鍛冶屋 (Der schmid)
17. 鍛冶屋の下僕 (Der schmidknecht)

結び

以上、ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』第一幕から第七幕までの展開を順番に辿ってきたことから明らかに確証できることは、第一幕、第二幕及び第七幕ではところどころに『ニーベルンゲンの歌』の影響が認められ、また第六幕では特に『ヴォルムスのバラ園』が題材に用いられていることが推定されるものの、この戯曲作品の主な素材としては十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』が用いられ、大筋においてはその韻文に従って物語が展開されているということである。もちろん作者ハンス・ザックスはその韻文作品を戯曲化するにあたって、大小さまざまな改作を施していることは言うまでもない。その改作の要点は次の五つにまとめることができよう。

まず最初に、それらの改作の多くは歌謡を戯曲へ移すことに伴うものである。第一幕における顧問官の助言や腕白少年を森へ遣わせる場面は若干改作を施すことで巧みに対話化されており、第二幕における竜との戦いについても数行のト書で済まされていて、その戦いの経過とゾイフリートの皮膚の角質化については主人公の語りという形式で説明されている。同様に第三幕においてはゾイフリートが侏儒王を岩壁に投げつける行為は削除され、また第四幕においては巨人がゾイフリートから受ける数多くの傷の描写は省略されており、さらに第五幕においては恐ろしい竜の接近する様子がグリームヒルト自身によって語られ、ゾイフリートと悪竜との戦いそのものはト書で簡単に語られて、戦いの末、ゾイフリートが竜を投げ落としてバラバラにする場面も数行のト書で済されている。これなども当時の戯曲形式にふさわしい改作であると言えよう。

改作はもちろんそれだけにとどまらず、第二に、韻文において散見された矛盾を作者はことごとく削除して、物語の筋立てを滑らかにしているのも当然の改作である。それによってゾイフリートは最初からギービッヒ王の使者としてグリームヒルト姫を救い出しに行くことが明らかであり、従って、第三幕でゾイフリートが侏儒王に出くわした場面でも、また第五幕でゾイフリートがグリームヒルト姫に再会した場面でも、対話の内容に何の矛盾もなく、滑らかな筋立てに組み替えられていることは、上ですでに述べた通りである。

また第三に、韻文『不死身のザイフリート』に読み取られた財宝エピソードが跡形もなく削除されていることも見逃してはなるまい。この削除に従って、第五幕で財宝をライン河に沈める場面もなくなっておれば、また同じ第五幕で侏儒王はゾイフリートの将来を占ったあと、韻文でのように自らの山へは帰らずに、そのままライン河畔のヴォルムスまで随行し、その宮廷に到着した場面ではゾイフリートの使者としての役割をも果たしている。このように侏儒王を

自由に取り扱うことによって、作者ハンス・ザックスはグリームヒルト姫の帰還を巧みに戯曲的に組み替えているのである。

第四に、ハンス・ザックスは素材エピソードを削除するだけではなく、逆に新しいエピソードを挿入してもいる。第六幕において不死身のゾイフリートとディートリヒ・フォン・ベルンとの間で行われる決闘がそれである。これは『ヴォルムスのバラ園』から引用されたものと推定されるが、この決闘エピソード挿入のきっかけは韻文『不死身のザイフリート』172詩節の叙述にあり、そこで指摘されているに過ぎない騎士たちの競技を実際に実現させたもので、別の言い方をすれば、ゾイフリートの結婚から暗殺までの八年間を埋めるためであったことは、すでに上で述べた通りである。しかし、より詳しく素材を検討してみるに、これはディートリヒとその武術の師匠の名前が挙げられている韻文15詩節7-8行目の代わりであるとも解釈することができるのである。ハンス・ザックスの戯曲ではもちろんその韻文15詩節は、その直前にある財宝エピソードの13-4詩節とともに、跡形もなく削除されているが、しかしその代わりとして、作者ハンス・ザックスは当時印刷術の発明によって広く流布していたであろう英雄本からゾイフリートとディートリヒの決闘のエピソードを巧みに挿入して、それを第六幕としたのである。このように一見、別の素材を用いているように見えながらも、実はこのディートリヒとの決闘エピソードは韻文15詩節と関係しているのであり、主たる素材の韻文『不死身のザイフリート』とまったく無関係でもなかったことが容易に理解できよう。

最後に、作者ハンス・ザックスが彼独自の新しい登場人物として伝令官に重要な役割を演じさせていることも見逃してはなるまい。伝令官はギービッヒ王の従者として作品全体を通じて登場し、筋の展開を助ける重要な役割を果たしているだけではなく、この戯曲の冒頭（プロローグ）では聴衆への挨拶と物語のあらましを伝えていれば、第七幕の最後（エピローグ）では全体を振り返って、主な登場人物について性格づけを行いながら教訓的・道徳的な戒めを施しているのである。このように伝令官を巧みに戯曲の中へ取り入れて、自らの戯曲作品を構築している点がハンス・ザックスの顕著な業績である。

以上のような大小さまざまな改作を施すことによって、作者ハンス・ザックスは自らの戯曲的世界を作り上げることに成功したのであるが、しかし、例えば、第六幕においてはゾイフリートの皮膚の角質化は前提とされながらも、あとの場面ではそれが無視されるなど、物語の筋立てに首尾一貫性が欠けるきらいがあることは否めない。第七幕の最後に伝令官が登場して主要人物について性格づけを行なっている場面でも、ゾイフリートは粗野な面だけが強調され、

グリームヒルトについても否定的な面だけが強調されている。また財宝エピソードの削除などからも明らかであるように、不死身のゾイフリートの伝承――作者にとっては伝説というより物語――はその本質においては触れられていない[32] と言わなければならない。このようにこの作品をニーベルンゲン伝承の一つとして読んでゆくと、不十分な点も多く認められるのである。すでに序で引用した「ハンス・ザックスは何一つ虚構しなかったが、しかし、(読んだものは)すべて書いた」というグリムの名言は、作者ハンス・ザックスの多産な創作活動を証明するものであると同時に、他方では彼の作品がすべて類型化され、独創性に乏しいことをも言い表しており、その創作活動の限界をも示していると言ってもよいであろう。しかし、これは当時としては当然のことであったのであろう。否、このようなハンス・ザックスこそ当時は当世風の文学者と言える存在であったのであり、これまで騎士階級の手にとどまっていたニーベルンゲン伝説は、こうしてようやくハンス・ザックスの手によって、多少歪められながらではあるものの、新しい市民文学の一つとして広く民衆の間に流布することとなったのである。 (1994年9月7日脱稿)

＊なお、本稿では人物名や地名などのカタカナ表記についてはできるだけ引用テクストに忠実に表記しているが、ヴルムス (Wurms) とペルン (Pern) については慣例に従って現代的な表記 (ヴォルムス、ベルン) にしていることを付記しておく。

32) Vgl. Elly STEFFEN: a.a.O., S.518.